



私はアメリカで死んでいた

実話にみる運命の謎

「奇跡のコース」の光にみる
転生の苦しみ

ラインハルト・リーア

私はアメリカで死んでいた

第一部

実話にみる運命の謎

第二部

「奇跡のコース」の光にみる

転生の苦しみ

ラインハルト・リーア

奥付

Copyright:

Reinhard Lier

Thalerstr. 49c, CH-9410 Heiden

info@lier.de

www.spiritual-mind-training.org

www.wunderurlaub.eu

www.ekiw-geistesfrieden-toskana.eu

著作物に関するすべての権利は著作者に帰属する。

ISBN: 978-3-906220-10-9

翻訳 小山千早

電子書籍翻案 ザビーネ真夜中

まえがき

52歳にもなると、これまでの経験の多くはすでに忘却の彼方だ。深刻な事態に陥っている当時はひどく苦しくとも、いったん乗り越えればその出来事はその先、大した意味を持たなくなる。



ラインハルト・リーア、2012年

それでもそれが本当に真なる体験なら、それが何かを解決するために役立つプロセスにつながるのであれば、ほかの人々にも役立つはずだ。そう考えた私は、人生の最初の26年間に起こった出来事を振り返ってみた。現在はそれからさらに26年が過ぎ、霊的教え「奇跡のコース」と体系的家族療法、いわゆる「ファミリー・コンステレーション」を主な活動としている。

転生はあるのか？ -答えは、イエスでもありノーでもある。それはすべての幻想と同じく夢の中のまた夢でしかない。そのため最高の〈真理〉という光の中、つまり神なる純粹な〈霊〉の中では何の意味も持たない。しかし一方で、転生は痛みや欲望に満ち満ちたあらゆる夢から覚めるプロセスの一環ともなりうる。それは〈神の安らぎ〉に帰り着くためのものであり、まず人々の苦悩の背景にどんな理由がひそんでいるのかを理解することが大切だ。そうすれば、この世という幻想劇からの出口が見つかりやすくなる。これについては本書の第二部で詳しく説明する。



ラインハルト・リーア、1980年

まずは、もうほとんど忘れつつある私の過去について記そう。私はその過去をすべて経験した。そして、苦しみ抜いた。この最初の26年が過ぎた後、折に触れて思ったものだ。幸福だった瞬間をすべて足してみても1週間にもならないだろうと。26年間で1週間。だがおそらく多くの、いやほとんどの人も同じだろう。私たちはみんな静かに、あるいは大声で嘆き悲しみながら苦しんでいる。そして、治癒の光を探し求めている。今日、私はこの光を心の中に感じ、またほかの人々もそれを自分の心の中に見出し始めたことに喜びを感じている。この光は狂気に満ち凶悪にふるまう世界を前に、平静と安らぎを与えてくれる。もはや剣に手を伸ばし、自分の心の複写でしかない世界の中で戦わなくともよいのだ。戦いがあるとすればそれは霊的なものだし、その戦場は人間の魂が作り出しているものだ。そこでは戦争か平和かの決定がなされている。そして、そこでは私たちに力が残されている。そう、心の中に。肉体は生まれて、いつか死ぬ。そこに残るものは、何もない。

本書が、命は永遠であるということに気づく一助になればと願う。たとえ「私の一生」や「私の多生」がしばらくはまだ幻想というレベルで演じられるにしても。読者の内面の治癒プロセスが促進され、自分にも他人にもより共感できるようになればと願う。なぜなら他人は自分でもあるからだ。私たち全員がただ一人の〈神の子〉であり、何十億にも分裂した自分に苦しんでいるのだ。大切なのはただ一つ。すべての行動を各自で、また相互に赦すこと。その行動は私たちが本当に行ったわけではない。それはすべて夢だったのだ。痛みに満ち、取るに足りぬ愚かな夢の数々。私たち全員がこの〈永劫の光〉に心

の目を向け始めることを願ってやまない。

ラインハルト・リーアスイス、ヴォルフハルデンにて
2013年1月19日



第一部

実話にみる運命の謎



私は他人を苦しませ
自分も苦しんだ
私は誕生と死を体験した
私は多くのことを拒否し、多くのことに同意した
私は戦い、追い払われ
戦争と平和を経験した
そこから形容しがたいあるものに対する
憧憬が生まれた
多く人はそれを平和と呼ぶ -
あるいはもっと大きく、愛と

衝撃

これから書き記してみることがらが本当に事実なのか、少なくとも自分で体験し苦しんだ事実どおりなのかと、私は何度も自問した。事実を、実際に起こったあまり喜ばしくない出来事を認識すると心が乱れ、魂の深淵が揺さぶられる。そのときには興味深いことに、いわゆる「アレルギー反応」なる現象がおきる。アレルギー反応が出る（心的・感情的なものがあふれ出たり、身体的な拒否反応が出たりする）のは、潜在意識の中に葛藤として残っている未解決の事柄に対してのみだ。アレルギー反応は魂に残る痛々しい傷口をなぞり、過去の問題を自己の顕在意識まで押し上げる。

このように自分の運命的な事実を意識することは苦しいプロセスであり、魂は激しい衝撃を受け、バランスを失う。まさしくこのような状態を私は幼いころから経験してきた。そしてまた、胸がかきむしられるようなその記憶ゆえに自分の過去をより詳しく知ろうとした。運命のもつれを潜り抜け歩んだ道を振り返ってみると、自分自身の死を経験したことは私にとって確かに重要ではあったが、運命という網が果てしなく大きいことを考えれば、これもその中の一つの出来事ではないと思うし、その思いは強くなるばかりでもある。この死の前にもいろいろな出来事があった。私はそれらの影響もまた、こう言ってよいものなら、今後の人生あるいは今の人生の中で体験しているのだ。

賢明な高位からの導き、私はそれを神の愛と受け取っているが、この導きは定められた運命に意味があることを慈悲深い方法で教えてくれた。これからその運命について書こうと思う。〈霊的世界〉が与えてくれたすべての支えに感謝しつつ。

ラインハルト・リーア誕生

私は1960年に生まれた。父である薬剤師のDr.ヴェルナー・リーアは1957年、ドイツはニーダーザクセン州のとある小さな町に居を構えた。そして3年後の春、妻のギゼラが二人目の子どもを出産する。これがつまり、勤勉な薬剤師Dr.ヴェルナー・リーアの息子ラインハルトとしての私の転生の始まりだ。



幼少時代を送った家、父の薬局

あるさわやかな5月の朝、私はやつとこの物質界に生まれ出た。しかし背骨が歪んでいたためあまり幸先の良いスタートとは言えなかった。私はしばらくの間ギプスベッドで過ごさねばならず、私も母もひどい苦痛を味わった。そのため母は必死になって危険を覚悟で、私をそのコルセットから解放してくれた。その後、定期的に体操を続けると、背中はずぐに良くなった。

今、当時を振り返ると、母とのぎごちない関係、より正確にいうと「母」というテーマとの不自然な関係はとても早くから示されていた。幼いころ、私は夜よく悪夢にうなされて汗びっしょりになって目を覚ました。その夢の中では外からアパートに入り、廊下の右手にある台所まで行かなければならなかった。廊下をゆっくりと歩いていく。その壁には台所で赤々と輝く炎が明るく反射している。私はいつもそこで不吉な予感に襲われ、不安になって視線を台所の中に向けてみる。すると、刃渡りの長い包丁を手にした恐ろしげな魔女が、襲い掛かるように私の方へやってくる。台所の窯はぱっくりと口を開き、生贄の私を飲み込む準備は万端だ。魔女が、私の命の終わりを示す大きな叫び声を上げる。ここでいつも目が覚めた。眠るとこの魔女がまた現れそうで怖くて仕方がなかった。



両親とともに、1961年8月

私の幼少年期は奇妙な重苦しさに包まれていた。中流家庭に育ち、傍から見た分には何不自由なく暮らしていたが、私はよく劣等感に苛まれ、場違いな所にいるような気がしていた。大晦日になり1年が終わるといふときには、生を否定する悲観的な雷雲がやってきた。そんなときには不吉な予感がしたり、じくじくと泣き訴えたりして放電するのが常だった。私は当時、この先には身体的な病や精神的な闘いが数多く待ち受けていて、道はさらに険しくなると知っていたに違いない。事実、3歳になるかならないかで早くも数日間入院することになった。格子で囲まれた子ども用ベッドに一人残され、両親が部屋を出て行くのを見て泣き叫ぶ自分の声が今でもまだ耳に残っている。病室のドアが閉まった瞬間に、両親の保護は奪い取られた。誰にも邪魔されることのない生来の信頼関係に支えられた世界が、がらがらと音を立てて崩れ去ってしまったのだ。一人ぼっちにされるなど理解できないことだった。私は見も知らぬ他人の手に完全に委ねられ、どうしようもない脱力感に襲われた。

6歳になると花粉症に悩まされはじめ、夏の間は少し暗くした涼しい部屋で過ごすようになった。夏休みはバルト海へ行った。ここでは症状が目に見えて良くなった。いつかアメリカに行きたいと両親に初めて話したのもこのころだ。もっとも二人がこれを真に受けることはなかったが。



父Dr.ヴェルナー・リーア、油絵、ラインハルト・リーア作、1980年

父は薬局で常に若者を教育していた。私が6歳のとき、アントン・アイヒエンフェルトという若者が実習を申し込んできた。昼休み、彼が車でガソリンスタンドに行くときには私も時々一緒に乗せてもらったりした。私と家族が住む町で、アントンは（父方の）祖母と一緒に暮らしていた。彼の父親は終戦間際に戦死し、母親は1940年代の終わりにアメリカに移住していた。

その後アントンは薬剤師の試験に合格し、博士号論文を書くことになった。そんなある日曜の朝、彼がうちへやってきた。1973年のクリスマス前のことだ。このときの情景は今でも忘れられず、ありありと臉に浮かぶ。アントンからは、ひどく悲観的で人生を否定するような雰囲気漂っていた。母との会話にもそれが明らかににじみ出ていた。彼はあのとき絶望のどん底にいたに違いない。このときの訪問は、助けを求めるアントンの最後の叫びだったのだと今になってみると思う。



薬局で働くアントン、1966年

彼がもうかなり前から麻薬中毒だったことを知ったのは、しばらく後のことだった。この日は私も彼と話をし、アメリカの農場で馬などの動物をたくさん飼っている彼の母親のことを聞いた。私はその話にひどく感動し、どうして彼はアメリカの母親の元で暮らさないのだから

うと不思議に思った。話を聞きながら、代わりに自分がアメリカに母親や農場や動物を持てたらどんなにいいかと思ったことを今でもよく覚えている。そのときの驚きはとても大きく、同時にまた、アントンを少しうらやましくも思ったりした。

1974年初春、恐ろしい出来事が起こった。アントンが自殺を図ったのだ。ある日の昼、私の在宅中に大学から男の人が3人父の店へやってきて悲報を伝えた。それから彼の祖母に連絡が行った。アメリカにいるアントンの母親には、私の両親が電話で連絡した。遠く離れた異国への通話は音質が悪かった。



父とアントン、カーニバルの祝いの席で、1966年

母が受話器に向かって「アントン・イズ・デッド（アントンが死んだ）」と叫ぶ声が今でも耳の奥に残っている。この悲報は私たちみんなにとって大きなショックだった。何もかも順調で博士論文にも取り組んでいた若い薬剤師は恋に破れ、人生に終止符を打ったのだった。彼の恋人はのちに、別れるのなら自殺すると脅されていたことを打ち明けた。

出会い

その後、私には次から次へとさまざまな出来事が起こった。まず、アントンの母マルガレーテ・ミラーが息子を埋葬するために二人目の夫ジョンとアメリカからドイツにやってきた。彼女を一目見た瞬間から、私の心はただ一つの思いにとらわれた。「ああ、この人が僕のお母さんだったら!」。私たち二人の間には、摩訶不思議な引力が存在していた。



不思議な出会い、両親の家のバルコニーで

私はマルガレーテにとってある意味息子の代わりで、彼女と彼女の夫ジョンは私の養父母だった。二人と過ごす時間は素晴らしく、ほかに経験したことのない、まるで夢のような感動すら覚えた。マルガレーテは突然私に農場を継がせると言い出し、できるだけ早くアメリカに来るよう求めた。しかし私は当時わずか14歳で、両親は少なくとも16歳の誕生日までは渡米させようとしなかった。

翌1975年、マルガレーテが前夫の母親マルタ・アイヒエンフェルトを訪ねて再びドイツにやってきた。私はしょっちゅう彼女と一緒に過ごし、アメリカのこと、農場のこと、動物のことについて話を聞いた。私たちは二人とも馬や田舎の暮らしが大好きだったし、私自身も10歳で乗馬を始めていた。マルガレーテの滞在中、私はアメリカで生活するという最も大きな目標に向かって動き出し、フランクフルトのアメリカ領事館から移住に必要な書類を送ってもらったりもした。1974年以降、つまりアントンが死んですぐに、私はほぼ毎週マルガレーテの年老いた元義母マルタの元を訪ねるようになっていた。そこでは、いつもとても楽しみにしていた儀式が繰り返された。まず、昔の話を聞く。マルタは同じ話をよく繰り返した。



そしてアメリカの写真の入った小箱を出してもらい、彼女自身も手紙や話でしか知らない農場やそこでの生活についてこと細かに話しても

らった。私はそれらの写真に強く魅せられた。私を強烈に惹きつける別世界がこちらに向かって輝いていた。

アントンの夜ごとの訪問

アントンの死とともに、私は特異な悪夢を見るようになった。「らせん夢」と名付けたその現象は何年間も私を苦しめ続けた。夢の中で、私は上方のある地点までらせんを描いて上っていく。ところが、そこにたどり着いたとたんらせんは壊れてしまい、私は死の淵へとまっさかさまに墮ちる。そして、誤って命をふいにしたという思い、また自ら命を絶たなくてはならないという思いに襲われて、目が覚める。しかし目が覚めてからも、本当に刃物で自分を殺さねばならないという強迫観念から逃れることはできなかつた。この恐ろしい夢の後には、2、30分もの間、もう早く人生を終わらせろという命令を自分の中で感知し続けた。私はどうすることもできず、よく父のベッドにもぐり込んだ。そうすると、いつもまたすぐ元気になった。今ではこのとき何が起こっていたのかよくわかる。アントンの魂が、繊細で率直だった私を訪ねてきていたのだ。彼は自殺の苦しみを私に伝えて、どうにかして気持ちを軽くしようとしていた。だが当時の私には、このような関連性はまだわからなかつた。死後も生き続けることを信じていない人が多くいるので、あの世に行ってもまだ自分が死んだことを理解していない魂が多いことを知ったのは、ずっと後になってからだった。特に自殺者は、まだこの世にいる人に自殺するときの感情を伝えたがる。彼らは誰かが自分のためにもう一度自殺をして初めてその苦しみから解放されると思っているのだ。



アントンは何年間にもわたって2週間から4週間おきくらいに定期的なやつてきた。そのときの強迫観念はこの上なくリアルで、彼がやつてくるたびにぞつとする恐ろしい思いをした。それは他人に操られている状態だったのだが、当時はそれを理解するために必要な背景知識

もなく、それとは知る由もなかった。

4回の渡米

1976年、私は初のアメリカ行きを控えて興奮していた。英語を勉強しはじめ、憑りつかれたように知識を吸収していった。何をしてもひどく簡単に思えた。



カンザスの農場、1981年ごろ

いざ出発という間際になって、一種の儀式のようなものをやっておかなければという衝動に駆られた。そして、誕生月の5月中旬に1本のとても美しい白樺を切り倒した。それは以前、自分で植えた木だった。その木を残らず小さく切って、幹の一片をアメリカへ持っていき、そこで燃やして灰を地面に埋めた。何故だかわからないが、そうせずにはいられなかった。



マルガレーテとジョン、馬のパレードで

こうして私は白樺の幹を荷物に入れてフランクフルトへ行き、そこからシカゴへと飛んだ。カンザスシティに着いたのは夜だった。マルガレーテとジョンが諸手を挙げて温かく出迎えてくれた。不思議なことにジョンは前とはずいぶん変わっていた。マルガレーテもすぐにそのことをドイツ語で教えてくれた。彼はとてもよく話し、異常なほど機嫌が良かったが、躁うつ病だったようで、しばらくするとまたうつ

家も農場もプレゼントしたがった。

アメリカに着いた夜、私たちは大きなリムジンを何時間も走らせ、夜中の1時ようやく大陸の中央西寄りにある小さな町に着いた。翌朝、農場へ行った。すべてが、魔法にかかり夢にでも見ているような光景だった。道路、家並み、木、電信柱、畑に動物、すべてに何となく懐かしさを覚えた。ずっと探していたものを見つけ、ゴールにたどり着いたような気分だった。



マルガレーテと馬、マルガレーテの右にいるのがラインハルト

ここに居続けたかった。だがその後、ある出来事が起こり、私は大きく混乱した。死やあの世、信仰、宗教といったテーマになると、マルガレーテがそれらを拒否するのがわかったのだ。彼女はこれらすべてを子ども向けの他愛ないおとぎ話だと思っていた。死んでしまえばすべて終わりだと思っていた。



百歩譲っても、せいぜい子どもの心の中に両親が生き続けているくらいだが、それも彼女にとってはアントンが自殺してしまったのだからもはや無理だと言うのだ。私が神やあの世の存在を信じているのはおかしい、非現実的だと決めつけた。私はひどく傷つき、このテーマにはもうなるべく触れないことにした。この一件で、彼女がこのような考え方にアレルギー反応を示し、苦々しい思いを抱いていることがはっきりとわかった。

そんな彼女に対して、私は次第にもっと別の感情を持つようになって

た。愛情と憎悪を同時に感じ、惹きつけられたり反発したりと相反する気持ちが入り混じるようになったのだ。



それは彼女も同じだったようだ。というのも、あるときは褒めちぎって私を天にも昇る気持ちにさせたかと思うと、またあるときはこてんぱんに批判ばかりして地にのめりこむほど落ち込ませたからだ。こんなふうに私は交互に押し寄せてくる感情の波に常にさらされていたのだが、それでも初訪米の翌年にはまたどうしても彼女を訪ねたくなった。そして、彼女もまたそれを心から望んだ。だが、私は二人の間に満ちている途方もない緊張感に苦しんでおり、1976年の秋に油絵を描き始めた。



1979年イツエホーエの学校で

絵の中で、魂を奈落に突き落とすような出来事と向き合おうとしたのだ。本書では、私の内面で起こっているプロセスを明確にし、魂の状態を最も強く表現した絵を紹介している。

2度目の訪米前、私は浮かれながら大切な写真や映像、思い出の品をカバンに詰め込んだ。これらの品はその後、（過去世の）故郷であるアメリカのとある銀行の貸金庫に長年預けっぱなしにしていた。



1980年、南仏ペルピニャン近郊で。自然の中で絵を描く

こうすることで、この土地に対する自分の権利を確かなものにしようとしたのだ。旅の前には、飛行機が落ちて自分はほかの乗客とともに助け出されるが、大切なものが入った荷物は海底に沈んだままになってしまうのではないかと不安になったりもした。そして、あとから発見されたときのために、水が入らないよう何もかもしっかりとパッキングした。当時私は、これらの品々を失ったら自分が誰だかわからなくなってしまうと思いつけていたのだ。

1977年の二度目の訪問では、状況はさらに悪化した。両親がシユレスヴィヒ・ホルシュタイン州へ引っ越すことになったので私は休暇を延長し、3カ月近くアメリカに滞在した。しかし、私の感情は矛盾に満ちていた。彼女のところにいるときには二度とアメリカなんかには来ないと誓ったのに、ドイツにいるときにはアメリカに行くために何でもした。アメリカの大学に通い、職を見つけ、いずれは完全に移住するつもりだった。夜には誰に言われるともなく英語を学び、イギリス出身の英語教師の個人レッスンを受けた。



何度目かの訪米中、私はある悪夢で目覚め、自殺をしろという命令を再び自分の中に聞いた。だが、この苦しみをマルガレーテに打ち明けるつもりはなく、また、もともとそうすることも叶わなかった。そこで彼女の犬を自分のところに連れてきて、力と落ち着きを取り戻すことにした。そう、アントンはアメリカまで私を追いかけてきたのだ。そこは私ではなく、彼が常に生きようとしていた土地だった。

マルガレーテとジョンとは、よく「外国への移住」について話し合った。ある日の夕方、農場で移住の条件が話題になったとき、マルガレーテがアメリカへの移住の難しさについて切り出した。彼女の息子アントンの場合もそうだった、と。彼もアメリカに移り住みたがったが、そうすると大学での勉強を一からやり直さなければならなかった。後から聞いたことだが、アントンは大学卒業後、失恋して二回服薬自殺を凶っていた。しかし、手遅れになる前に彼の祖母が発見したのだった。アントンは父親がいないこと、そして母親とも離れて暮らしていることにたいそう苦しんでいた。アメリカにはほぼ毎年母マルガレーテを訪ねて来ていた。アメリカに留まりたいという彼の望みはとて大きく、別れは毎回、耐え難いものだったようだ。



私もアントンと同じ心境だった。アメリカに住むことがどんなに大変かという事実が絶望的になっていた。農場でのあの夜、私は広々とした野原へ行き、悲痛を抑えきれず激しく泣いた。このときの話は私の生命の中枢に命中し、心の奥底でわが身が攻撃されていると感じた。なぜならこのときも、私に対する拒否感がマルガレーテから感じ取られたからだ。私はこのような相反する感情に疲れ果て、また憂鬱になって、その深い落ち込みからなかなか這い上がることができなかつた。



自画像、1980年ザルツブルクの夏季アカデミーで

19歳になった1979年、私は再び渡米し、ウエストバージニアにある馬術の専門学校に通った。ところがここで精神的にまいってしまった。内なる声が、この土地から一刻も早く去るよう強く求めたのだ。私は何故ともわからずほっとしたが、アメリカの大学で勉強するという計画はまだあきらめていなかった。

これに加え、二つのショック状態で体験した奇妙な出来事についても触れておこう。1979年ごろのある晩、ドイツで車を走らせていたとき、盗んだ車を乗り回していた青少年たちにぶつけられてしまった。車は両方とも動かなくなり、若者たちは車外へ飛び出して逃げていく。私は驚いて、逃げる若者に向かって叫んだ。だが、その言葉はなんと英語だった。1、2分の間、私の口からは英語しか出てこなかった。もう一つ肝を冷やす状況に出くわしたが、そのときも同じだった。奥深い層にあった魂が上昇してきて、日常のラインハルトが脇へ押しのけられる感じだった。しかし、このときはこの出来事にもっと深い意味が含まれていたことをまだ知らずにいた。



1977年以降、私はひどいかゆみを伴う重症の皮膚病に悩まされた。血が出るまで皮膚をかきむしり、睡眠薬なしでは眠ることもできなくなった。絶望的になって、冬に裸足で雪野原をさ迷い歩いたこともある。神経性皮膚炎と呼ばれるこの病気に絶望し、精根尽き果てた状態だった。ところがアメリカに滞在し、運命を握るテーマとより近く向き合っているときはいつも格段に良くなるのだった。



1980年、私はこのような多くの問題を抱えながらもアビトゥーア（大学入学資格試験）に合格し、アメリカの芸術アカデミー「ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン」に受験を申し込んだ。1年間集中して受験勉強し、1981年の夏、ついにアメリカに向けて飛び立った。試験に合格し、夢を実現させたのだ。だがそれは間もなく悪夢となった。アメリカへ行って7か月と7日間、私は精神的に恐しく苦しんだ。心の葛藤が極端に激化した。自殺願望が湧き上がり、この勉強は私がなすべき本来の任務ではないと感じて、自問を繰り返した。1981年10月、再び内なる声が聞こえた。それは今すぐにアカデミーを辞めろと言っていた。いつもどおり、外からもサインが届いた。ある女学生からもらったしおりに英語でこう書かれていたのだ。「わたしはまた〈主〉の声を聞いた。〈主〉はこう言われた。『誰をつかわそうか。誰がわれわれの使徒となってくれるだろうか』。そのときわたしは言った。『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください』（イザヤ書6：8）」



これではつきりした。私はドイツへ帰るべきだった。帰らなければならなかった。両親に電話でその旨を伝え、マルガレーテにも電話した。彼女はその前に自分のところに寄って、クリスマスが終わるまでの数週間を一緒に過ごしてくれと懇願した。まさにそうしないようにと私は固く決心していたのだが、その意志はもろくも崩され、11月にカンザスの彼女のところに移った。



そのとき彼女と一緒に過ごした時間は、これまで以上に残酷だった。原因もわからないまま緊張が高まり続けた。そのころ彼女は夫とともに農場に住みながら、町での仕事を続けていた。日中、私は動物と一緒に過ごしたが、どんどん力が失せていき、ぐったりとベッドに転がっていることが多くなった。午後になってマルガレーテが帰ってくるころには、すぐに顔を合わせなくてもよいようにと遠く離れた草原に逃げ込んだ。この苦しい場所から離れたいがばかりに逃亡計画を練ったりもしたが、結局飛べる飛行機は決まっていたし、それまでどこか別の場所に住むお金もなかった。こうして私は寂莫としたこの農場に、ある意味「島流し」になっていたのだ。そこでは心の葛藤や非難、屈辱に幾度となく苦しめられた。マルガレーテからは、苦々しい思いやこれまで繰り返し経験してきた落胆や失敗が、否定的で重苦しい人柄となってにじみ出ていた。これは私にとって終わりなき苦悶だった。なぜなら1982年1月にドイツに戻ったあとも、マルガレーテは夢の中に現れて私を苦しめ続けたからだ。目が覚めているときさえ、テレパシーでもういい加減に自殺をしろと駆り立てる声が聞こえてきた。



1982年春、私はハンブルクで治療師の勉強を始めた。相変わらず、マルガレーテはどのようにしてこんなに私を苦しめ続けるのかと自問を繰り返していた。運命のモザイクはまだ混沌としたままで、肝心なピ

ースが欠けていた。見つかりそうになったことも何度かあったが、過去をはつきりと遡るまでには至らなかった。たとえば年上の女性に恋をしたことがある。そのときには、自分が彼女のおなかの中にいる子どもで、そこで安心して休んでいるという、とても情念的な想像に浸った。そんな明らかなしるしが現れていたにもかかわらず、この謎を解くことはできなかった。答えを聞いたのは、魂がもたえ苦しんだ後の1982年秋だった。「お前はマルガレーテとカルマで結ばれているのだ」。その声をはつきりと聞いた私はびっくり仰天した。



この言葉に私はすっかり動転し、マルガレーテの人生の中で私はいったい誰だったのだろうかと思いをめぐらして、眠れぬ一夜を過ごした。転生を信じていた私は、まず彼女の最初の夫、Dr.ユルゲン・アイヒエンフェルトだったのかもしれないと考えた。彼は終戦間際に野戦病院の医師として出兵し、1945年春、アメリカとの戦場で戦死した。時を同じくしてマルガレーテ・アイヒエンフェルトは妊娠に気づき、1946年初めに息子のアントンを出産した。アントンを育てたのはほとんどユルゲンの父母マルタとカール＝フリートリヒ・アイヒエンフェルトとってよかった。そして1957年、彼らが住むニーダーザクセン州のその小さな町に薬剤師だった私の父が引っ越してきたのだ。



ハンブルクで治療師の勉強中に、1982年

私は母からマルガレーテの過去を詳しく聞いた。戦後の困窮した時代、彼女はある女友達と一緒にアメリカを短期旅行する機会を得た。友達はすぐに帰ってきたが、マルガレーテは40年代の終わりからアメリカに留まり続け、息子呼び寄せてよりよい新生活を築こうと、その準備をした。看護婦の資格を持っていたのでまもなくカンザス州の小さな町で職を得、そのあとすぐにアントンを引き取ろうとしたのだが、さまざまな理由から結局叶わなかった。クリスマスや夏季には彼女の元義父母の元で暮らすアントンを訪ねた。アントンも夏休みにはよくアメリカへ行った。母親の二人目の夫との関係も良好で、楽しく過ごした。アントンがまたドイツへと帰ったのは唯一、一人息子を戦争で亡くした祖父母のためだった。だがこれはいつも心に深い葛藤を招いた。このころアントンはある新聞の悩み相談に、祖父母も母も傷つけないのだが、この特別な状況で自分はどのようにふるまえばよいのかと聞いている。



私はこれらの出来事が自分とどのようなかわりを持っているのか、つらつらと考えた。そして1983年2月、マルガレーテの最初の夫Dr.ユルゲン・アイヒエンフェルトの生まれ故郷を訪ねてみた。ゲッティンゲンにほど近い小さな村で、年老いた村人たちと話をした。当時の写真を見せてもらったが、困惑も驚きも、感じるものは何もなかった。そこにあるアントンの墓にも行ったが、何の成果を得ることもなく、落胆を抱えて村を離れた。

そのとき私はマルガレーテが1950年代に中絶をしたという母の話を思い出した。彼女は母にかなり個人的なことをたくさん話しており、中絶のことも打ち明けていたのだった。50年代の初め、アメリカにいたマルガレーテは建築技師で農場経営者でもあったジョン・ミラーと結婚し、数年後に妊娠した。その間もドイツに残してきた息子アントンとは手紙や電話で絶えず連絡を取っていた。身ごもっていることに気づいたとき、マルガレーテは彼に電話で、弟か妹ができたかどうかと尋ねた。アントンは訊かれるなり逆上し、そんなことになったら自殺すると言い放った。邪魔者扱いされ見向きもされなくな

るという不安に襲われた彼は、自分のほかに兄弟ができることを許さなかつた。息子のこのような反応にマルガレーテは絶望的になり、すぐに中絶手術を受けたのだった。



疑いが固まった。おそらく私は、アメリカでマルガレーテから生まれようとしていたこの子どもだったのだ。私は無数のパズルピースを組み立て始めた。あるとき経験した出来事も気になった。治療師になるための教育を受けているとき、大きなガラス瓶に保存されたさまざまな成長過程の胎児を見る機会があつた。生まれる前の存在を目の当たりにした私は深いショックを受けた。敬意と憐憫の情を示すために恭しくひざまずきたいくらいだった。みんながこのような無抵抗の存在を無関心に眺めていられることを恥ずかしく思った。私の中には無言の叫びが響いていた。

中絶の経験

そして1983年3月、ついに忘却というベールが剥がされた。私はすべてを知り、その少しあと日記にこう記した。

「夜中に目が覚め、自分の身に危険が迫っているような不吉な胸騒ぎを覚えた。目を閉じると、光の点が一つ見えた。それはどんどん大きくなって、胎児の形になった。その胎児の原形に見覚えがあつた。それがさらに大きくなると、僕は不安とパニックに陥つた。というのも、突然、自分がこの光の形成物となり、すべてが自分の中に移り込んできたからだ。足は汗でびっしょり濡れ、死ぬのではないかと怯え震えた。すると、何かが僕を引っ張り出した。僕を守ってくれる居慣れた場所から引っ張り出そうとした。息がだんだん荒くなり、意識はしっかりしているのに、断末魔の苦しみを味わつた。引っ張られたり小突かれたりしていたが、とうとう我慢が出来なくなつたところでベッドから跳ね起きた。ほとんど気が狂いそうだった。そして英語でこう呻いた。『*How can you do that?* (どうしてこんな目に合わせるん

だ?)』。僕は吐き出され、引っ張り出され、捨てられ、処理されたのだった」



魂はきっと中絶という悲劇をこんなふうを経験するのだろう。そう、これは私が経験した中絶にほかならなかった。(前世における)母と思われるあの人の9年前の再会以来、私は彼女のことばかり考えていたのだから。アメリカに行くためにあんなに必死になったこともこれで説明がつく。そして、この出来事に端を発する深い懊悩から己を解き放つために、まだ生きている母と知らず知らずのうちにつながりを持つようと、いや、赦し合おうと努力したことも。それにしても、マルガレーテに対するこの愛憎の交差はいつたい何なのか。何年にもわたって私をひどく苦しめたマルガレーテ。私はあれこれと考えを巡らせたがまだ疑念が残り、高位の靈的指導者に明らかなしるしを見せてくれるよう求めた。

その数日後、私は母ギゼラ・リーアに、自分の過去を探っていることやそこでいきついた推測、そして中絶を体験したことについて話した。母は私がおく幼いころから、靈的・神秘主義的なことについていろいろと教えてくれていた。そんな母に自分の体験を話すと、母は私も知っている産婦人科医の話をしだした。その医者がよく中絶の手術をしていたと知るや否や、私は泣きじやくりだし、次の瞬間には大声で激しく泣きわめいていた。あらん限りの声を振り絞って叫び、あらん限りのものを罵倒し、絶望の淵で怒り狂った。その叫び声は異様に大きく、魂の最深層から吹き出していた。魂の中の無意識が引き裂かれて穴が開き、それが激しいアレルギー反応となって現れたのだった。命を助けることが仕事のはずの医者が絶え間なく中絶手術を行っていたと知り、私はほとんど狂気に陥りそうだった。30秒ほど叫び続けたらろう。クッションを投げ、絨毯の上に倒れ込み、両手で床を殴りつつ、叫んだ。「*How can he do that?* (どうして彼はそんなこ

とができるんだ?)」。私は文字どおり我を忘れていた。すさまじい痛みを伴う記憶が解き放たれ、ほとんど耐えがたいほどはつきりと目の前に現れていた。



こうして私は過去の自分の三位（霊、魂、肉体）を見分け、感知した。今や、死ぬときの痛みも理解でき体験できた。運命の重荷から解き放たれたように感じ、新しい人生を歩み始めることができると思った。まるで自分が生まれ変わったようだった。そして、どうしてもマルガレーテと仲直りしたいと考えた。私は彼女の人生を、運命が定めた数多くの打撃を、そしてアントンと話しあい中絶を決めたときの絶望感を思った。長い時間散歩しながら、魂の奥深くにある動きを観察した。内側と外側の出来事がぴつたりと一つになったようだった。1983年5月の日記に私はこう記している。

「しずくがしたたるほど森は湿っていた。雨が地面を濡らしていた。ある野原に来ると、一面を埋め尽くした穂が雨混じりの風の中で轟き荒れ狂う海のごとく身をくねらせていた。緑豊かな木々に囲まれた小道に入る。この道は人生だった。僕の人生。ここでは過去が過去であることを止め、未来は知らぬ間に身に着けた何か懐かしい、よく知っているもののように思えた。すべてが雨のしずくに溶け込み、ほんの一瞬、僕は自分という存在から抜け出した。と同時に、なおかつその真ん中にいた。こんな矛盾が僕を満たした。時間は意識を組み伏せる幻想、あるいはジョークやいたずらのように思えた。僕は森羅万象の中にある、あの忘れ去られた、だがよく知っているものを感じ取った。そして、動くことのない沈黙がやってきた」

ここまで来た今、過去に経験した多くの事柄がやっと思味を持つようになった。子どものころにあんな悪夢を見たわけがようやくはつきりした。あの魔女はわが子を殺す女性だ。口を開いた窯は子宮を表している。何かが孵化すべきなのに、その場所が予定より早く開られたためにそこは死に場所に様変わりした。別離の象徴であるナイフは死を招く道具だ。台所は手術室を、炎の光は殺されるとき地の獄の苦しみを映し出していた。

そして、切り倒された白樺の持つ深い意味にも気がついた。私はその木切れをアメリカへ持っていったのだが、それはこの木を自分に見立て、アメリカに根を張らせようとしたのだった。だが、自分は墮胎されていることから、まずその木を殺し、そして自分自身を切り刻まなければならなかった。かつてアメリカで起こった殺人の鏡像としてドイツで木が殺された。その後、私はアメリカの農場でこの幹の木切れを燃やし、埋葬の儀式のようにその灰を本来の故郷である国の土に返した。これで象徴的に故郷に戻ることができ、多少心が安らいだのだった。

ずいぶん前、マルガレーテとの会話の中で真実にかかなり近づいた瞬間があった。アメリカでのある晩、話題が「中絶」に及んだときだ。私はマルガレーテにしごくはつきりと、中絶は自分にとっては殺人だと言い切った。彼女は戸惑ったはずだが、当時私は彼女が中絶したことをまだ知らなかった。

数分間、英語しか出てこなかったあのショック状態も中絶と関係があった。私の死は英語を話す医師たちが招いたものだったし、アメリカでマルガレーテが妊娠したとき、私は彼女の体内で数週間、言語感覚に強い影響を受けたはずだ。このときに刻み付けられた情報が無意識の中に留まり、新しい人生にも随伴した。英語をいとも簡単に学んだのはそのためだ。

1981年1月に見た夢が日記に記されている。「妊娠」というテーマと、生まれつつある子どもに対する畏敬の念がかかなりはつきりと示された夢だ。辺りは薄暗い。私は広い部屋にいた。そこに妊婦がやってきて私と対峙する。彼女は寝間着のような服を着ていた。私はそのボタンを外し、頭を彼女の胸にもたせかけた。そして、その頭を腹へと下ろしつつひざまずいた。

死者との接触

私は夜なかなか寝つかれず、いろいろなことについて考えをめぐらした。暗い部屋の中にいると大きな不安に襲われ、明るい雲の切れ端が数知れずせわしく動くのを感じた。これはいったい何を意味するのだろうと思っていたが、間もなくその答えを得た。私は中絶された無数の魂に囲まれていたのだ。それらの魂は私がいろいろと学んでいくプロセスにとっても大きな関心を寄せていたようだ。一方でまた彼らは混乱し、疎外感を感じていた。そして憎悪と復讐心に燃え盛ってい

た。そこで私は彼らと話をし始めた。静かに語り掛けると、魂はテレパシーで答えてきた。こうしてこのさ迷う哀れな魂の世話をすることが私の役目となり、今の状況を説明したり、それぞれの母や父、そしてまた中絶手術を行った医師にもそれなりの事情があったことをわかってもらおうとしたりした。このように代願の祈りを行いながら、私は自己を解放しすべてを赦す愛にたどり着く道筋を彼らに示そうとしたのだ。間もなく多くの哀れな魂がこの世から離れていった。

アメリカの母と最後に会う　－　そして別離

1985年10月、私は再びアメリカへ行かなければという思いに駆られた。一つには東海岸で送った短い大学生活の後片付けがまだ残っていたこと、もう一つにはマルガレーテとジョンをもう一度訪ねたいと思ったためだ。11月初旬に飛び、フィラデルフィアでいくつか用事を済ませたあと、2000キロ以上離れたアメリカの母マルガレーテの農場へとヒッチハイクの旅をした。長い道のりだった。だが、敢えてこのような方法で克服したかった。二人の苦しい過去が詰まった土地に1キロ近づくたびに、彼女のための祈りがどんどん切実になっていった。

マルガレーテがかつて住んでいたあの小さな町にたどり着いたとき（彼女はそのとき農場に住んでいた）、私は何か不思議な、夢を見ているかのような感情に包まれた。およそ30年をかけて一連の出来事が完結したにもかかわらず、時間の隔たりは感じなかった。私はこの場所で生きるはずだった。それなのに、ここは私が死ぬ場所となってしまった。じつとりとした南風が、自分は始末されたのだという記憶を、現在の過去でまだ救済されていない記憶を呼び覚ました。私はまだ彼らと結ばれていた。マルガレーテと、ジョンと、医師と、そしてアントンと。だが今、私は神の恵みを得た。それはこの悲劇全体を意識して眺め、自分を苦しめた人々のために赦しを請うというものだった。私はこの場所でこのような霊的な務めを果たすことになっていた。



永遠の生命への判決

一方、マルガレーテはこんなことは一切想像だにしていなかった。私は何者なのか、何も知らないままだった。私も私で、このことを彼女に言ってはならないとわかっていた。本当のことを知れば、彼女はひどい衝撃を受け、心筋梗塞を起こしかねなかったからだ。あるいは私を頭のおかしい奴だと決めつけ、それですべてを片付けようとしたかもしれない。だから、私は黙っているほかなかったのだ。

農場への最後の数マイルは、背丈の高い、乾燥し切った草むらの中を歩いた。何だか奇妙な気分だった。玄関のブザーを押す。マルガレーテがドアを開ける。ひどく驚いて、私を抱き寄せる。彼女は心臓を病んでいた。私はすぐ、自分の意見や考えを話すときは慎重にならなければいけないと思った。昔の話は今もタブーだった。ドイツの元義母の家をめぐる親戚が醜い相続争いをしていることから、マルガレーテは愛や赦しについても聞く耳を持たなかった。人生はもはや生き残りをかけた闘いであり、そこでは自分の言い分を通すものだと考えていた。

彼女と過ごした9日間は、私の魂を試す最後の大きな試練となった。マルガレーテとアントンのために幾度となく祈り、彼女の周りを取り巻く憎しみに満ちた力や実体あるものすべてに変化が起こるよう願った。彼女の生きがいは私のそれとはもう違っていった。そう思うと、とても胸が痛んだ。彼女は私のことをもうまったく理解できなくなっていた。マルガレーテは私の歩んできた道をしらなかつたし、結局のところ私が本当は誰でありどんな人間なのかを知ろうとも思わなかつたのだ。彼女の世界は夫のジョンと、田舎の物寂しい生活と、テ

レビだった。私は二人の接点となる内面的な共通項を探したが、ほとんど何も見つからなかった。



それでも、マルガレーテは私とこんな風にして出会うよりほかなかったのだろう。彼女はこのようにして我が身を守り、私という存在を目の前にしながら自分の魂を何とか生き延びさせようとしていた。何といっても私は彼女が中絶した子どもなのだ。そのことは彼女の日常的な意識からはシャットアウトされていたが、魂の深層にはおそらくしっかりと刻み込まれていたに違いない。

一つ確かなのは、私たちは永遠の中で再び巡り会うだろうということだ。ひょっとしたら、そのときにはもっと彼女の力になれるかもしれない。いつの日か彼女があの日へ渡るときには、そばにいて何かの役に立ちたいと強く願った。今は素晴らしい霊的体験を通じて私に贈られたものについて語ってはならなかったが、少なくとも永遠の中ではこれらの内面的な宝物のすべてを彼女と分かち合えるときがくるのではないか。そう望むばかりだった。

滞在期間が終わりに近づいたころ、アントンの死をめぐる再び激しい言い争いになった。私は必死で、アントンは生き続けており、彼女にしても死んだ後も生き続けるのだということをおぼえてもらおうとしたが、マルガレーテはこのような考え方に猛烈に反駁した。最高の愛の表れである霊の法則を少しでも伝えたかったが、それも叶わなかった。彼女の目には、私は現実を見ることができない単に頭のおかしい奴としか映らなかった。

私は再び祈りに没頭した。そしてイエス・キリストとともに、イエス・キリストの中で落ち着きを取り戻し、力と自分らしさを取り戻した。マルガレーテは病気で身体的にも精神的にも元気がなかった。それでも私は彼女をそのままにしておくしかなかった。自分にできる最も大切なことはもうやり終えていた。つまり、マルガレーテが過去に何をしようとして、彼女を赦してもらうために神の前でこの人を弁護

することだ。マルガレーテとは愛を通じていつまでも結ばれたままだと信じていた。彼女が私のことをどう思っているかが、私の助けになってくれようがくれまいが、そんなことはどうでもよかった。このようにして、私たちの関係はカンザスシティの空港で幕を閉じた。外見上それは崩壊したかに見えたが、心の中で私は二人を深く結びつけている神の愛に望みをかけていた。それによって彼女は変わる。私たち二人を過去の非情な出来事から洗い清め、永遠の中でまた新たにひきあわせてくれるのは、この神の愛のみなのだ。



マルガレーテが出てきた夢の数々には、私たちの関係の変遷がとてもよく投影されていた。最初に私が体験したのは激しい問責と屈辱だった。そののち、私たちは一つの柵で分かたれたまま、黙って見つめ合った。農場を歩き回り、家の中に入って彼女と話し合おうとしたことも何度かあった。そのあとの夢では、私は彼女の家の台所に座り、彼女が私のために食事の支度をしてくれた。幼いころに見た、台所に人殺しの魔女がいた悪夢ではなくなっていた。私は彼女と向き合い、彼女の元を繰り返し訪れ、運命の謎を解き明かそうとしていた。そしてついに楽しい時間を過ごし、抱擁するまでになった。過去の暗い影はどんどん消えていった。

ある夢の中では、私は彼女と車を走らせ、愛の本質や愛する人のためなら死をも恐れない献身について話をした。これはイエス・キリストが歩んだ道だった。私は、マルガレーテもアントンのために自分を犠牲にしたのだと言った。たいへんなときもあつたのに、彼が生きている間ずっときちんとお金を送っていたのだから、と。彼女は静かに、心を開いて耳を傾けていた。

マルタ・アイヒエンフェルトの墓で

1986年11月の訪米直後、マルガレーテの元義母マルタ・アイ

ヒエンフェルトが亡くなった。その翌年の夏以来、私はマルタとその夫、二人の息子のユルゲン、そして孫のアントンが埋葬されている墓地を訪れていない。マルタは結局三人の家族の誰よりも長生きした。

この家族の墓の前に立つのは、（私の過去世の）異父兄弟で私の中絶の原因、私の死の原因の一人となったアントンの墓の前に立つのは、奇妙なことだった。私はこの世とあの世を隔てる敷居の上に立っていた。彼らがみんな、魂として生き続けており、彼らと話すことができることを、私は直感的に知っていた。私は彼らのために祈った。特に11年前に自殺したアントンのために。今となつては、身体を伴うこの物質的な命が何とはかなく感じられることか。あの世ではこととても異なる条件で存在している時間に、もはやどんな意味があるというのか。まだこの世にいる人も、すでにあの世にいる人も、関係のあるすべての人々のために、私は彼らの愛のない行いに対する赦しを請い、また彼らも彼らに負い目がある人を赦し、神の前で、愛の前でその人たちの無罪を宣言してくれるよう祈った。これまでの出来事、これまでの苦悩はすべて夢だったような気がした。まるで優れた演出の舞台劇のようだった。それは突然終わりを告げたが、生はこれからも続く。私の魂は永遠のひとかけらに触れ、脳裏に彼ら全員の姿を見た。生き生きとし、これまでと違った、完全な愛により近づいた彼らを。

中絶前の19世紀ロシアでの人生

1983年4月、もう一つとても気になる疑問が湧いた。なぜ自分が中絶という経験をしなくてはならなかったのかということだ。この体験の大元は何だったのか、私にどのくらいその責任があったのか。私は早くから自分が被害者「でもあり」加害者「でもあった」はずだと考えていたし、自分がとても危険な地盤の上を動いていることもわかっていて。過去世を知ったために気が狂った人はこれまでも大勢いるからだ。それゆえ私は催眠術などを使って無理やり知ろうとせずに、祈りの中で常に自分の霊的指導者もしくは守護天使と結ばれるようにした。霊的指導者が現れて何かを示そうとしているときははっきりとそれを感じ取った。ことあるごとにイエス・キリストの庇護を求め、自分にとって本当に意味のあるときにのみ過去世を教えてくれるよう、それも混乱しないように少しずつ示してくれるよう請うた。

それは苦渋の連夜だった。内面のバランスを保てるよう何度も祈った。魂の深淵をさまよい、多くの死者と接触した。彼らは私と同じく、救済の光を渴望していた。1984年11月の日記に私はこう書

いている。

「魂の痛み、魂の苦しみ、これはおそらく被造物が堕ちた根本原因と最も深くかかわっているものに違いない。このような魂の責め苦、精神の錯乱、狂気に比べれば、身体的な苦しみなど色あせるだけだ。そうして人は存在しなくなることを望むようになる。無への憧れが魂を捕える。自己破壊の衝動だ。施設に入っている人の気持ちがわかる。苦しめられ、苦痛に満たされ、何か打つ手はないかと模索し、脅迫行為の中で気を紛らわせているのだ。もう一つの世界、死者と亡霊と悪魔が棲む帝国と結ばれていることが最もはつきりと感じられるのは、おそらくこのような状態に違いない。最大の苦しみは耐え難きを耐えねばならないこと。もはや逃げることはできない。ここから救い出してくれるのは『彼』、『イエス・キリスト』のみだ」

アンドレア・ペトラシユ

1983年4月、私は友人を通じてアンドレア・ペトラシユと知り合った。当初、彼女から感じられたのは悲痛な当惑だった。心の中で彼女にチャンネルを合わせてみると深い悲しみが沸き起こり、私はその部屋を出て別の部屋でひとしきり泣いた。私たちの間には何か重い苦しいもの、負担になるものがあつたのだが、それが何なのかを見極めることはまだできなかつた。一度は彼女に会って家へ帰る途中、車の中で突然、悲しみと怒りに襲われた。ものすごい圧力で何かが爆発した。車の運転もままならなくなり、エンジンを止めると外に出て号泣した。二人の頭上には過去という暗い星が瞬いていた。その星は、苦痛の中で二人を引き寄せると同時に破滅に導くことを予告していた。

1983年6月、私は長い苦悩の挙句、日記にこう書いた。

「これまでの時間がぼやけていくように感じる。すべてがずれ、いつでも好きなときに呼び出せる。そして、過去の苦痛に満ちた影が今一度生き返ろうとしている。どんな風にかはわからないが、古い出来事が僕に追いついてきた。僕は多くの人物であり、多くの人生を生きてきた。何度も繰り返される音楽のように。素敵でもの悲しいメロデー。もろく柔らかでありながら挑発的で、人をすっかり独占してしまう音楽。輪は閉じ、すべてはメリーゴーランドのようだ。僕にそれを止めることはできない」

私たちが共有する過去世は、早くもその秋に明らかになった。ある夜、私は覚醒状態で激しい胸騒ぎに襲われながら次のような情景を見

たのだ。ある前世でアンドレアが机の上に横たわっていた。だがその体の中にいるのは私で、彼女の視野で中絶の手術を受けていた。それは非常な痛みを伴うおぞましい手術で、どうやら白いタイル張りの部屋で行われているようだった。血みどろの白衣を着た男が開かれた両足の前に立ち、手際よく子どもの殺害を進めていた。彼女は身を悶えさせ、大声で叫んでいた。私はその恐ろしい苦痛を味わった。

ここではつきりと示されたのは中絶をする医師という当時の私の役割だった。サンクトペテルブルクの上流社会の夫人が中絶のために時折私の元を訪れていた。それは当時すでに、暗黙の了解の中でごく普通に行われていた。今や、私はこのような手術のときに女性がどのように感じるかということも理解できた。アンドレアと私の中で悲劇的だったのは、複数の子どもを一緒になって殺していたことだった。私はこのことを知り、またこの行いに対して赦しを請うために彼女と再会しなければならなかったのだ。霊的指導者は平和裡にアンドレアと別れるよう求めていたとみえ、その後私はそれを示す明らかなサインを受け取った。

それと同時に、私の中で昔のロシアに対する愛情が目覚めた。そう、12歳から16歳までの少年期はまさにこの過去世を反映していた。自然と深く結びついた田舎での簡素な生活、そしてとりわけ馬に対する愛情にそれが表れていた。当時私は、東から来た元機関士の老人のところで余暇を過ごした。祈祷僧ラスプーチンに似た彼は、乗馬や馬車の御し方、畑の耕し方や干し草の作り方、庭仕事、物置小屋や家畜小屋の建て方を教えてくれた。察するに、私は少なくとも（過去世の）子ども時代は遠いロシアの田舎で育ったようだ。この老人が住んでいた、小屋や馬や馬車があった小さな家に私は不思議といつも魅力を感じていた。あのころが、青少年期で最も素晴らしい時期だった。



マリア・ベンツロフとアレクサンダー・シュタイン

1983年、私は旧ロシアでの私の過去世と関係があると思われる

二人の人間と知り合った。マリア・ベンツロフとアレクサンダー・シュタインだ。風変りな回り道をした挙句、ある日私はある年老いた女性のところへと行くことになった。彼女はハンブルクの小さなアパートで長い間独り暮らしをしていたが、健康を害していた。会うなり、私たちはすぐに深いつながりを感じた。彼女はロシア正教会の信者で、間もなく私たちは一緒に伝統的な礼拝へ行くようになった。それは感動的な経験であり、このときに私は聖像や香煙、聖歌への愛を再発見した。

私たちは時折会って、宗教的な問題や心理学について何時間も語り合った。彼女は、私のロシアでの過去世で何か重要な役割を果たしていたに違いない。だがそれが何だったのか、詳しいことはまだ示されていない。

一つ、1983年10月に見た夢がとても大事だという気がする。大きな川のほとりで、私は大勢の人を前に「平和」について話していた。ロシア正教会の行進が金色の聖像を担いで野道を近づいてきたとき、川の波が私の足元を濡らした。長いひげを蓄え、美しい衣服をまとい、宗教画を携えた大勢の司祭が私の前を通り過ぎていく。私は掌を合わせ、その両手をインド風に額へ持っていきながらお辞儀をした。

一方、アレクサンダー・シュタインとの出会いは気が滅入るものだった。彼は才能ある詩人で音楽家でもあったが、ハンブルクの裏通りに面したみすぼらしいアパートに住み、生活保護を受けながら細々と暮らしていた。「転生」の話になったとき、自分の前世は旧ロシアの大地主だったらしいと言う。霊媒能力のある知人にそう言われたのだそうだ。だが彼はこのような考え方を断固として受け入れない人だった。私は長い時間をかけ、霊の法則について自分が認識している事柄を伝えようとしたが、彼は周りの環境、特に裕福な人々に対する不平不満をこぼすばかりだった。アレクサンダーは自分を、周囲から情け容赦なく抑圧されている天才的な芸術家だと思っていた。間もなく私は、彼が自分のことばかり話していることや無意識に自分の過去世を非難していることに気がついた。当時のロシアには強い権力を持った大地主層があり、その多くが農奴や農夫を冷酷にこき使っていた。今日、彼は暗いアパートで惨めな生活をし、当時抑圧されていた農民たちの苦悩を味わっているのだった。

アレクサンダーにとって特につらいのはその境遇だった。芸術的な才能にとっても恵まれていたふうだが、作品は一つも売れなかった。誰

一人、彼や彼の作品とかかわろうとしなかった。私は何度か彼の役に立とうとしたが、彼の内なる姿勢がそれをすべて遮断した。彼は自分がほかの人より優れていると思っており、「卑しい大衆」はいずれにしても自分の芸術にはふさわしくないと考えていた。このような高慢と他人に対する攻撃的な態度に私は意気阻喪した。彼は要求が多く、すべてを欲したが、最も大切なものを人にあげようとしなかった。つまり、愛を。

間もなく私は、何時間もかけた長い話し合いが無駄だったことを悟った。彼はいつも自分の凝り固まった見方を繰り返すばかりで、一度としてわが身を振り返ろうとしなかった。そのため、私は話すたびに疲れ果てた。ひよつとしたら間違ったことをしたのかもしれないが、もうどうしてよいかわからなくなって自分の正直な気持ちを伝える手紙を彼に送った。根本的には彼をかわいそうに思っていた。彼は堂々巡りをし、大きな苦悩に打ちのめされていたのだが、それは彼が自分の影の部分を見ようとしなかったからだった。

これらの出会いや体験の後、私は過去世を探求するのを止めた。これ以上遡って過去世を知りたいと思わなかったし、それらの時をそつとしておけることをありがたく思ったからだ。それから数年して、自分が聖職者として何回か生まれ変わり、修道士や僧侶として果たした役割が示された。このときは「性生活」や男女関係というテーマを徹底的に追及することになったが、その根は遠く陰鬱な中世まで遡っていた。そこでは多くの聖職者が内側で分裂を起こし、自分の女性的な面や男性としての存在を極限まで抑圧していた。その結果、聖職者は自分の影を女性に投影し、その女性たちは魔女として身を焼かれることになった。

女性との遅い出会い

私を激しく攻撃し非難する女性にはこれまで何度も出会った。そんな時、二人の関係には必ずカルマ的な背景が隠されていた。また、肉体化が修道僧や聖職者、そしてロシアの医者という二つの領域に分かれることもいつも同じだった。ある（過去世での）出会いの中では体よく責任を押し付けられ、最終的に大金をはたいて「自由を買い戻した」こともあった。



苦痛を覚える奇妙な関係の多くは、このような過去世での出来事
端を発しているのではないだろうか。かつて多くの女性を拷問で苦し
めた聖職者が、現在ある女性の暴虐な夫となっている。そしてその女
性は以前、魔女だとされて彼に苦しめられ、挙句の果てに殺された女
性だった。こんなこともあり得るだろう。彼女はセックスでこの男性
を自分の元に繋ぎ止め、彼が全く望んでもいなかった子どもを産むこ
とに成功する。彼は彼で彼女との婚姻を拒み、距離を保つ。このよう
に、転生後の出会いの多くは聖書にある信条「目には目を、歯には歯
を」を地で行く悲痛な復讐劇なのだ。

これに関連する出来事は、私の（過去世での）ロシア時代に中絶さ
れ生まれ変わった子どもたちとの出会いをもって終わった。彼らの顔
を直視すると、気持ちがこわばり不安になった。罪は私たちを麻痺さ
せ、自己破壊的な刺激を招く。本書の第二部ではこのような罪の動力
学の背景について詳細に説明する。



最後に

マルガレーテは2004年12月6日に、夫のジョンは2007年
7月23日に亡くなった。表向きのコンタクトは1980年代の終わ
りに途絶えていた。カンザスのあの場所はあれ以来訪れたことがな

い。すべてはもはや過去の出来事となったようだ。

私はといえば1984年に結婚し、2人の子どもに恵まれた。今では5人の孫がいる。1992年に離婚。そのほぼ20年後に再婚し、2009年からスイスに住んでいる。2006年に霊的教え「奇跡のコース」と出会って以来、私の治癒プロセスはとても深い次元まで届くようになった。

1986年、私は自分の経験を書き記し、1987年に初めて本にした。題名はまさしく『赦しを求めるとき (Wenn du Vergebung suchst)』。私たちの悪夢の中では常に「罪」がその中心にあったし、それは今も変わらない。(私の過去世における)中絶では少なくとも3人の人間がかかわっていた。母、父、そして医師。それに4番目の運命のパートナーとして子どもが加わる。続く第二部では、このような運命的な出来事の背景を「奇跡のコース」の見地からひも解いていく。治癒と安らぎを見つけたいのであれば、出来事を霊的な目で眺める必要がある。心を癒す見方は目の前にある。私たちの誰もが新たな選択をせんことを。私たちは誰しも召されているのだから。



問： どうすれば完全無欠を得られるのですか

マハラジ： 静かでありなさい。やるべきことをやりながら内面の平穏
を保ちなさい

そうすればすべてがあなたのもとを訪れるでしょう
実現させたいのなら、自分の行動を頼りとしてはなりません

他者がその恩恵に与ることはあるかもしれないが

あなたが利益を得ることはありません

希望が現れるのはあなたの理性と心が静謐になったとき

実現を遂げた人はとても落ち着いているのです

(ニサルガダッタ・マハラジ、3巻、140頁)

第二部

「奇跡のコース」の光にみる
転生の苦しみ

本質的な意味において、転生は不可能です
過去も未来も存在せず
肉体への誕生 - 一度であれ複数回であれ - という観念には
意味がないからです
転生はつまり、何か本当の意味において真実ではありえないのです
唯一問うべきは、このような考え方が助けになるかということ
それはもちろん、何に利用するかによって変わります
いのちという永遠の存在への理解を深めるために
利用されるのであれば
そのときは事実、助けになるのです

(「奇跡のコース」 ドイツ語版、教師用マニュアル 24.1:1-6)

備考

言葉は象徴のそのまた象徴である。誰しも必ず経験できる何かについて説明しようとするとき、言葉は意識して体験したことがらへ導く案内役となり、頭の中で考えていることを明確にしてくれる。そのため、本書では神などの特定の言葉を使っているが、それについてはあまり気にしないでほしい。この言葉は愛や光など、自分にとってしっくりくる言葉に変えてもらってかまわない。神の〈存在〉、〈神〉、〈彼の愛〉、〈霊的世界〉あるいは〈導き〉というとき、私はたいてい〈でくくり、このような最高の“レベル”を〈最高のもの〉としてはつきりと強調する。これはまた〈神の霊〉から生まれ出た〈霊〉、真の〈自己〉でもある。そしてそれは〈神の存在〉と全く関係のない偽の自己、自我とは異なるものだ。〈神〉は男性形として〈彼〉と表されるが、実際は性もなければ人でもなく、形もない。言葉という枠の中では通常、対極的な考えから生まれた隠喩やシンボルを使わざるを得ないのである。

人間とは何か

私たち人間が運命的な経験をするときには、いつも必ずこう問われる。人間とは何か。一番しっくりくるのはどんな人間像なのか、どんな人間像が私たちの中の真実に当てはまるのか。私たちは無から出て無へと消える単なる肉体なのか。魂や霊などの概念にはどんな意味があるのか。

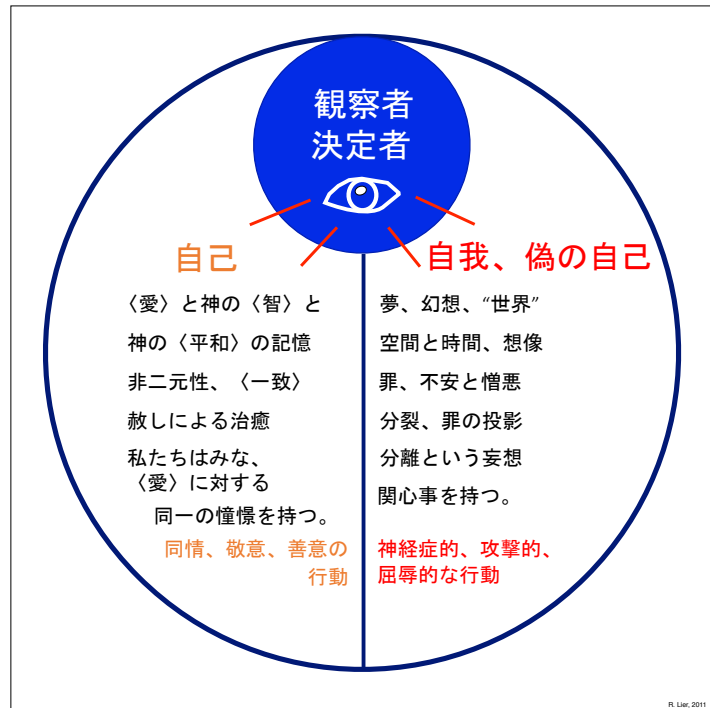
ここではそれを、霊的教え「奇跡のコース」を引用しながら説明していく。アメリカの心理学教授Dr.ヘレン・シャックマンは1960年代半ば、覚醒状態で内なる声を聞いた。そして、「奇跡のコース」の元となった、広域にわたる膨大な量の口述筆記をし始めた。同じ心理学教授のDr.ウィリアム・セットフォードは、このテキストが霊的な側面において非常に細分化されており、心理学的・スピリチュアル的にも深く掘り下げられていることがわかったことから、この声を信頼するようにとシャックマンを支え勇気づけた。そしてほぼ7年がかりの筆記作業の後、テキスト、ワークブック、教師用マニュアルの三部からなる作品が完成し、のちの「*Foundation for Inner Peace*（内なる平和のための財団）」を通じて徐々に公開されていくことになったのである。

「奇跡のコース」（略称ACIM）が示す人間像はとてはつきりしている。私たちが経験している地上での生は夢の中の心的マトリクス（訳注：ものを生み出す母体、発生源）で、人間像はその流れで見なければならぬ。そしてまたもう一方で、背後に隠れている〈現実〉とも結びついている、というものだ。

私たちは神の真実という光の中にいる〈自己〉である。それは完全無欠の心、〈神の霊〉から生まれた〈霊〉、〈神の一人の子〉、〈彼〉との〈一致〉の中にある〈彼〉の完璧な創造物だ。〈神〉は二元的ではなく、〈不二一元〉である。その〈神の子〉の心の一部が夢の中に堕ちた。しかし、それは〈神〉にとってはまったく事実ではなく、実在しない。なぜなら、唯一〈現実〉である〈彼〉は夢を見ないからだ。堕ちた一部は自分を分離という原理と同一視し、自我を生み出した。そして、自我もまた投影というプロセスと切っても切れない関係にあることから、この世界を作り出した原因に数えられる（この後詳細に説明）。

自我と〈自己〉に続く第三の審級（訳注：判断レベル）として、すべ

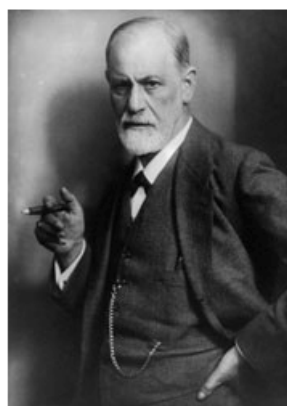
てを黙って観察し、常に決定を下し続けている観察者や決定者と呼ばれる部分がある。ここは無意識に反射的な反応をするが、この観察能力を意識的に訓練すれば、この審級は私たちにとって非常に有益になりうる。意識的な決定の基礎を作っているのは、愛に貢献するものとしなないものをよく見極めた、冷静で明瞭な観察だ。これら三つの各部分の一つにまとめて分裂した心と呼ばれる。この世界を夢見ているのは、この分裂した心だ。それは正しい心情の心（〈自己〉）、間違っった心情の心（自我）、そして観察者および決定者から成っている。



私たちが経験しているこの地上世界は、〈神の現実〉に抵抗しようと、夢見る心が作ったものだ。私たちはそれを信仰により分離という思考に投影した。本当は、自我も世界も存在しない。それが本当のように見えるのは、単に私たちがそれを信じたがっているからである。この世界の元となっているのは私たちの心の中で行われる決定だけだ。そのため、決定者という審級の果たす役割が最も重要なものとなる。決定者は加害者や被害者との苦しい同一視から私たちを解放するため、私たちが見ている悪夢の中でシンボルのような働きをする。私たちは自分で創った（夢に見ている！）世界に対する全責任を負い、あらゆる出来事を含め自分たちの運命に対する全責任を負う。そしてやがて、治癒を選択するという決定をし始める。〈愛〉を選び〈神〉を選ぶと決定すると、私たちの中で離別や分離が相殺される。このような決定は強い意志がないとできないものであり、私たちが持つ本来の霊的能力や解放への道へ向かおうとする力を表すものである。そしてまた、治癒が実行されるときには同時に贈り物と恩恵をも受け取っていることから、これこそが本来の奇跡であると言えよう。まずは、誰も

が経験する核の部分の葛藤についてじっくりと考察してみたい。

自我の狂気について初めて明解な記述を行ったのはジークムント・フロイトで、20世紀のことである。投影についての洞察は性理論を凌駕し、不安と憎悪という罪が抑圧された場合の影響を考える基礎を成した。



ジークムント・フロイト/写真No.1

〈神〉から分離したという罪悪感、この罪業が現実のものだと信じるのは恐ろしくまた耐え難いことから、この罪は分裂して一部が無意識の中へと入り込み、そこで埋もれてしまう。また、内なる圧力が異常に大きいため、罪はほかの人々に投影されながら憎悪へと変わっていく。こうして、自分の苦しみは常に他人のせいとなり、そんな人々が迫害や刑を受け、最悪の場合は死んでも当然だと受け止められる。自分の不幸の原因を、他人や不当な運命や神の中に探すのである。

しかし一方ではまた、このような一貫した憎悪が再び罪悪感を生み出し、さらにこの罪悪感に対する不安を生み、同時に復讐されるかもしれないという不安をも呼び起こす。最悪の場合、復讐する人のイメージは神に投影され、彼の真の本質、つまり無条件の(愛)を見誤らせてしまう。憎悪や憎悪による攻撃は、不安や罪よりも耐えやすい。人は恐れるものに攻撃をしかける。攻撃をしかけるのは不安を感じているからだ。つまり、不安は魂の麻痺、あるいは外に向けた爆発的な現象すなわち攻撃を導くのである。

抑制された不安 - より正確には罪！ - は、うつへと変わり、罪と不安と憎悪は入り乱れて互いに攻撃し合うようになる。これは厳密には一つの現象と見なされる。悪循環に封じ込められ、そこから逃れるのは不可能であるかのようだ。深い憎悪はまた、誰かに復讐されるのではないかという不安も引き起こす。

私たちが作り出した、分裂した心からできた世界は、このような破壊的なプロセスが土台になっている。それは、キリスト教会が教えるように6日間で神が創り出したのではなく、自我という心の投影でしかないこの物質界にまで続いている。罪業、罪、不安、憎悪が人を攻撃的にさせ、その攻撃性の上にこの世界が作られた。ACIMが言うように、この物質界全体は〈愛〉への攻撃、〈神〉への攻撃を表すものだ。その元になっているのはむき出しの憎悪であり、それは純粋な〈愛〉から逃避した結果である。私たちが投影している世界には、常に勝者と敗者がいる。それはこの世界が幻想であり、〈神の現実〉、つまり純粋な〈愛〉とまったく交わることがないからだ。

転生を理解するための基礎として次のことを認識しておく必要がある。私たちの中には罪と不安と憎悪という悪循環に囚われ分裂した、病気の心が宿っている。治癒と救済をもたらすのは、内観（罪悪の投影を行わないこと）や〈霊〉とともに歩む道のみである。

では、そもそもなぜこのような不幸な状況が訪れたのだろうか。ACIMは、一つの図でその答えを暗示している。そして残念ながら、心が分裂した状態にある私たちにはそれ以上のことは理解できない。

あなたに足りないもので唯一本当に正すべきものは、〈神〉から分離したという気持ちのみです。

（「奇跡のコース」ドイツ語版;T1;VI, 2 :1;P. 14）

〈天国〉ではすべてが一つだったし、今も一つだ。そこに二元性はない。二元性は私たちにしてみればごく普通で害のない現象だが、この形を取るものはすべて分離という考えから生まれた幻覚であり、〈天国〉に行けばいつかそれが“ちっぽけな妄想”であることに気がつく。このような分離という考えは、〈天国〉の〈現実〉と〈真実〉の中では、嘘としか言いようのないばかげた考え方なのだ。

私たちは本当は全員〈神の子〉なのに、残念ながらこのばかげた考え方を笑い飛ばせなくなっている。笑い飛ばすことを忘れてしまったのだ。こうして〈神の子〉はこのような考え方に“感染”し、その本質の一部とともに眠りに落ちて、以来私たちがよく知るこの世界を夢見続けている。そこではすべての現象が分離、つまり二元性に基づいている。息を吸い息を吐く、誕生と死、合成プロセスと分解プロセス、愉悦と苦痛、昼と夜。分離のない世界などほとんど想像もできない。せいぜい天国の至福の状態をぼんやりと覚えているくらいだろう。

この夢の中で〈神の子〉は何十億にも分裂（分離）し、そこで生まれた一つの自我もまた何十億に分裂して今日肉体の中で息づきながら人間を形作り、あらゆるレベルで互いに戦い合っている。眠る神の子は夢という妄想に深く入り込み過ぎたがゆえに、〈愛〉・〈神〉を攻撃し破壊したと思い込んだ。同時に神が仕返しをするのではないかという不安に襲われ、旧約聖書にある復讐に燃える神の投影イメージが生まれた。このような神は、嫉妬、非中立、復讐、殺人といった、精神異常者の本質的特性をすべて持ち合わせている。

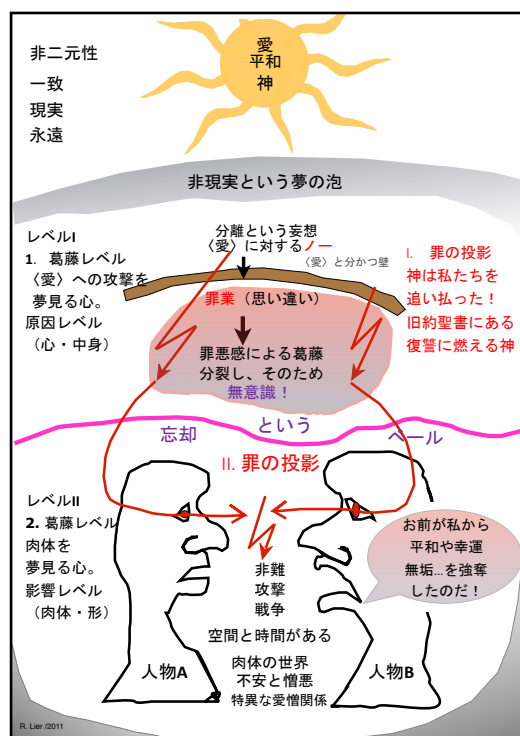
というわけで、分離という考え自体がそもそも罪業なのだ。より正確には、それは私たちの心に宿る誤りであり、修正しなくてはならないものである。この罪業を信じることによって、自我発生の基礎が出来上がる。自我は、罪業があり、その結果罪が生まれると信じる心によって生きながらえる。神の子は〈神〉が攻撃されているのは自分のせいだと思い、物質的な（夢という）今の世界にどこまでも深く逃げ込んでいったのだ。

私たちはこの世の非情という闇を選んだ。だがACIMは、この世界は事実上存在しないと言いきっている。私たちの心が単に夢の中でそう信じているだけなのだ。ACIMが本の中で明言しているように、〈天国〉の外に生命は存在しない。私たちは〈神の愛〉の向こう側にある世界を経験したいという自分たちの決定を、その決定を通じて現れた世界に投影しているのだ。そして、そこにいる共演者全員、関係者全員がこの世界で演じられている舞台劇を信じているのである。分離を信じているため、つまり分離すると決定したため、私たちはそれを体験することにもなった。私たちが感知するものには己の病んだ心的状態が映し出されているが、それは〈現実〉を表すものではまったくない。なぜなら、私たちの五感はいかげな心の投影しか感じ取れないからである。

分裂した心（自我あるいは偽の自己）が生み出したものはすべて完全な幻想であり、現実や真実だとは言えない。来ては去り、次の瞬間にはもう消え失せてしまうものがどうして現実であろうか。それは夢のようにはないものであるし、それはこれからもずっと変わらない。自我の心は物理的な宇宙全体を投影しており、プログラミングされたコンピューターアニメーションくらい、たとえば「セカンドライフ」のようなバーチャル世界と同じくらい現実味がある完璧な幻想なのだ。キーを一つ叩けばすべては無と化す。物質界のプログラマーもバーチャル世界のプログラマーも“夢見る”心であり、私たちは観察や

決定をする立場にいる。その心は実験的現実として時間と空間の世界を作るよう私たちの脳に命令する。脳はその命令を受け取るのみで、自分自身ではどうすることもできない。感知の元は心のみ。すべての感知は心の中の投影であり、すべては次の確信に基づいている。

結局のところ、空間は時間と等しく無意味です。両者は単なる確信でしかありません（「奇跡のコース」ドイツ語版;T-1;VI.3:5-6 ;P. 14）。

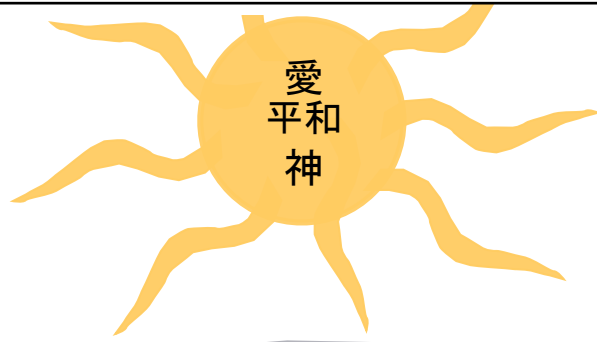


夢見る心は自分を肉体の中に投影し、体を持つ生き物として生きたいと願う。しかしその体は心の中の幻影でしかない。肉体は分離をより強化し、いかにももつともらしく見せるために作られたものだ。また、肉体は罪を“ほかの肉体”、つまり見たところ自分ではない人々に投影させることも可能だが、これは結局のところ間違っている。分離は存在しないし、ほかの人々（肉体）を攻撃しても、その矛先は常に自分一人に向いているからだ。



1941年ソ連北部。六人の男性（“パルチザン”）処刑時の射殺の号令/写真No.2

非二元性
一致
現実
永遠



非現実という夢の泡

レベルI

1. 葛藤レベル

〈愛〉への攻撃を
夢見る心。
原因レベル
(心・中身)

分離という妄想
〈愛〉に対するノ—
〈愛〉と分かつ壁

罪業 (思い違い)

罪悪感による葛藤
分裂し、そのため
無意識!

I. 罪の投影
神は私たちが
追い払った!
旧約聖書にある
復讐に燃える神

忘却 という へール

レベルII

2. 葛藤レベル

肉体を
夢見る心。
影響レベル
(肉体・形)

II. 罪の投影

非難
攻撃
戦争

お前が私から
平和や幸運
無垢...を強奪
したのだ!

空間と時間がある

肉体の世界
不安と憎悪
特異な愛憎関係

人物A

人物B

写真の兵士たちは見たところ自分とは違う別の人間と対峙しているようだが、実は自分自身を射殺している。他人に与えるものは常に自分自身に与えているのだ。これが心の（夢の）現実だ。私が行っている体系的家族療法（ファミリー・コンステレーション）により次のことがわかっている。これらの兵士の子どもや孫は自分の父や祖父の犠牲者になって彼らを形象化し、その苦悩を自分の中で感知する。これらすべてが意味しているのは、私たちは魂として実は互いに入り混じって存在しているということだ。私たちは実は一つなのだ。一つの心なのだ。私たちは今も〈神の霊〉の中で休んでいるのだが、（〈神〉の隣や外側というものは存在しないのだから、そのほかにどこにすることが出来よう）、〈愛〉との分離という罪業をむりやり信じ込まされていることからこのような追放の身分を夢に見ているのである。

それではここで、人の一生を追ってみよう。その始まりと終わりは誕生と死であり、その間に涙と笑いにあふれた劇的な体験がたくさん詰まっている。おそらく涙の量の方が圧倒的に多いため、幸福を探せとつかれる。このような経験のすべてを結晶化したのが人間関係だ。人類の歴史はそのような関係の連綿とした重なり合いだ。生命は（私たちが知っているような）関係であると哲学者マルティン・ブーバーも言っている。このような関係のすべてにおいて、みな一人の神の子として自分を見ていると考えたとき、霊的に言えば私はあなただ。私があるに与えるものは、常に自分にも与えている。私があるから奪うものは常に自分からも奪っているのだ。



オーストリアのアーベンゼー強制収容所から解放された人々/写真No.3（

参考文献一覧参照）彼らの苦しみは私の苦しみでもある。

もしかしたら私は、強制収容所の中で権利をはく奪され、屈辱を味わい、不安にさらされながら死を目前にするという運命にあったかもしれないのだから

それでは、自分はどんな風にほかの人々を見ているのだろうか。私たちはいつも他人を、自分自身を（こっそりと）見ているように見ている。神秘主義者が好んで議論するものに「鏡の法則」があるが、こ

の法則がこれに相当する。自分自身を知るために必要なのは相手という鏡だけ、というわけだ。だが、これは常に、まず自己中心的で不安に満ち、欲求ばかりの私たち人間という生き物を認識することから始まる。ACIMによると、そこには特異な愛憎関係があるという。そこで私はこう考えた。自己を補足するため、自分がどうやら無くしてしまったものをまた取り戻すために、私はあなたを必要とする。私は分離した世界で〈天国〉の幸福を探し求めている。自分自身をより完璧に感じ、安らぎのひとつを感じ取るために、対象物（人間、理念、芸術、物……）を習得し、心の中に吸収しながら。だが、形のレベルであるこの世界全体はいつまでたっても分離と不足の象徴でしかありえない。ここで解決法を見つけることはできないのだ。

願望の実現や安らぎは心の性質であって、夢見る心の病的な投影でしかないこの世界の性質ではない。心には決定する力がある。幻想を選ぶか、それとも〈真実〉を選ぶかという決定だ。この世界の道を行くか、それとも霊的な道を行くか。しかし、自分はさしあたり夢に囚われており、この心の力をまだ認識していない。それは、自分が体を持つ生き物だと完全に信じ切っている上、被害者の役回りへと、ひいては罪の投影の中へと逃げ込んでしまうことが多いからだ。

この世に生を受けた人間は、自分が何も知らないことを知らない。霊的な視野を持たないままわが身を打ち据え、苦悩や不安に満ちた心的緊張のせいで肉体に入ることになった。安らぎに満ちた心は肉体化しなくともよいし、することもない。より正確に言えば、肉体の中の生命を夢見なくともよいのだ。



リエージュ（ベルギー）の城塞に収容されたドイツの秘密国家警察（ゲシュタポ）のメンバー/写真No.4

（参考文献一覧参照）これも私である。罪を背負った確信犯。一個の人間。彼が選択するものは？ 私が選択するものは？ 私は彼をどんなふうに見るのだろうか？ それは自分自身を見るように、だ

前で述べてきた罪は世界を動かし、世界を作り、夢を見させる感情的なエンジンだ。罪は間に合わせの策（肉体化）を通じて教室を作ろうと、私たちを想像へと駆り立てる。この教室は、終わることなく夢を見続けるため、あるいは目覚めるために使われる。目覚めようと決心するタイミングは、苦しみが最大になり、安らぎへの憧憬が最強になったときに熟す。具現を繰り返す歯車に私たちを連れていった罪の圧力はとても大きい。それがゆえにこれらすべての背後にあるものを探ろうという意志もいつしか押し留めることができなくなる。意志がないところには道もなく、愚鈍と無知という苦悩があるのみだ。それでも理解を望む意志が燃え上がると、漆黒の悪夢の中にも光が見え始める。

私は、転生はあるのだと誰かを納得させようとしているのでは毛頭ない。誰しも嘘偽りなく己を発見し、そこで見つけたものをそのまま信じてよいのだし、今では転生が問題なのではないことは私にもわかっている。幻想に基づいたこの構造は私たちがかかわるべき本来の事柄ではない。本来の焦点は心そのものにあり、心は成長過程でメダルの表裏両面、つまり加害者と被害者を経験する。このような学びのプロセスの中心テーマは互いに愛を分かち合うこと、赦しのプロセスを通じて無条件の愛の本質を魂の中に刻印することだ。そうして不安を覚えることなく、不変の愛という心-〈神〉の元に帰るのである。

このようなことから、自分自身の運命や、自分と結ばれ自分を投影しているすべての人々の運命を受け入れて、それを自分が目覚めるために利用するのは良いことだと言えよう。私がマルガレーテの中に見出し、彼女とともに経験したこと、それは私だった。原因も責任も自分にある私自身の過去だった。これらすべては、〈愛〉に対して私（たち）がノーを示したという根源的な葛藤を反映していただけなのだ。霊的教えACIMは、この忘れ去られた（分裂した）根源的な葛藤について一番目の夢を用いて説明している。

この世界はこれまでさまざまな夢を見てきました。そんな夢の作用から逃れたい。どのくらい強くあなたはそう願っているでしょう。自分の行動の原因である夢がもう現れないようにしたい。そんな願いを持っていますか。それならあなたが行うべきことは、私たちにその夢の始まりを見せるだけ。ただそれだけでよいのです。なぜなら、あなたが今見ているのは二番目の夢でしかなく、その原因は一番目の夢にあるからです。眠りながらこの世界で夢を見ている人は、自分自身を攻撃していることを思い出すことができません。肉体があることなど

つゆ知らず、この世界が現実だとは思ってもよらなかったときが本当にあったと信じる人は誰もいないのです。そんなことは一つの幻想でしかない、ほかのことであればそんなことは一笑に付すだけだと、すぐにわかったはずなのに。それなのに、そんな概念が今やなんとまっとうに思われていることでしょう。それらに嘲笑と懷疑が向けられたのがいつだったかということも、もはや誰も覚えていません。それを思い出せるのは、その原因を直接見つめたときのみです。そうすれば不安の原因ではなく、笑う理由が見えるはずなのです。

(「奇跡のコース」ドイツ語版;Greuthof-Verlag :テキストブック、27, VIII.5 :1-10/太字は著者による)

上記は、夢の原因を探る一節である。だが、その原因を私たちは思い出すことができない。自分自身を攻撃したことを誰も覚えていないからだ。こうして私たちは完全な忘却、記憶喪失というベールに突き当たる。これは、自我(分離という観念)が私たちを夢の中に閉じ込めておくために使う効果的なトリックだ。私たちは神を攻撃したと思い込んでいるがそれは間違いで、本当は自分自身を攻撃していた。一人の(神の子)である私たち自身を。ところが、私たちはこの出来事を忘れてしまい、もう思い出すことができない。それでも、このトラウマ的な出来事が発する衝撃波は今もまだ感じ取っている。

分離という観念を本気にしていることから私たちはトラウマ的な状況に陥り、(神)を攻撃したと信じ込んでいる。これがACIMで学ぶ大切な認識である。(神)を傷つけることも(彼)と別れることもできないということ、私たちはもう感知できなくなった。こうして(神)から分離したと信じながら、唯一自分自身を攻撃した。その結果一人の(神の子)の心の中に罪の葛藤が渦巻いた。この罪の圧力を減らそうと、自我は夢を見る心の、無意識の領域での分裂を可能にした。しかし、それも長続きさせられなかった。脇に押しつけられた罪がよそに吐き出されるべき圧力を生み出したからだ。

こうしてこのような罪の圧力から、分離を確認し何よりも罪を“他人”に投影できるようにするために、肉体という幻想が生まれた。(霊的世界)から肉体世界への墮罪が実行されたわけだ。空間(肉体)と時間という幻想が、私たちの心の中にインストールされた。私たちは誰も“肉体の中で”考え、感じる。あの世と呼ばれる天国や(霊的世界)でさえ、肉体を持つ天球だと想像している。ということは、転生も肉体と同じ程度でしか信じることができないわけだ。肉体がなければ転生という構想は意味をなさない。ところが本当は空間も時間もな

く、ひいては(純粹な靈)には肉体もない。ゆえにこれらすべては夢でしかなく、そこでは(現実には)何も起こっていないのだ。

夜、ときどき私たちが苦しませる夢を思い出してほしい。そこでは何もかもが本当に現実のように思える。自分を殺そうとする恐ろしい動物や人間がいて、命がけて逃げる。痛みも欲望も感じる。肉体にまで現れる性的欲求も感じて、ハッと目が覚めたりする。それでも実際には何も起こっていない。自分はずっとベッドに横たわって何もしていないのだから。殺されてもいないし、誰も殺してもいない。浮気をしたわけでもない。こうして見れば、私たちが常に自分の肉体的経験で現実度を測っていることがよくわかる。私たちは自分を一つの肉体だと思っており、そのように解釈することにこだわっている。それどころか、自分たちが肉体に法外な意味を持たせていることにすら気づいていない。自分たちの知覚によって物事はこうなっているのだと思い込み、肉体という幻想が幻の感覚器を作り出していることに気づかないでいる。これはすべて当たり前で論理的であるかのように見えるが、やはりおかしいことなのだ。思考体系というものは、論理的でありながら虚構ということもありうる。私たちは自分の肉体に始まりと終わりがあることを知っていながら、このようなまやかしのカーテンの後ろを覗こうともしない。これは無知というしかないが、本当に演じられている劇を知ろうとする人はほとんどいない。シェイクスピアはそれをずばりこう言っている。空騒ぎ- 間違いの喜劇- お気に召すまま。

ACIMはこの分離という観念を非常に小さな妄想だと言っている。この観念はいったん現れそうになったが、またすぐに消えた。(神の全体性)を考えれば、それは不可能なことだったからだ。(神の子)が本気にしたこの妄想の中で、あらゆる夢が見られ、あらゆる人生が流れてきた。しかし、(永遠)の前では何も起こっていない。このような夢のすべて、全世界、この宇宙、これらはどれも存在したことはなかったのだ。しかし、私たちの心の中にそのような認識が広がり出すと不快感が生まれ、私たちは不安と安らぎの間を揺れ動くようになる。なぜなら、私たちの中の一部は今のこの世界を求めているし、自我(分離という観念)が差し出すものをすでに受け取ってしまっているからだ。私たちはそれに加担し、苦しみながら、罪、不安、憎悪という代価を支払う羽目になったのである。

私たちの中のもう一つの部分は、かすかではあるがこのような錯乱的な世界にはない(安らぎ)を覚えている。それは恐ろしいことであっ

ばいのこの世界を超越し、あらゆる夢から目覚めよという呼びかけだ。問題はただ一つ、私たちはそうしたいのか、自分はそうしたいのか、ということである。

肉体化したときに赦しや治癒の刺激が欠けていると、物理的な死の後に緊張と不安が発生する。世界中で多くの人々が描写している臨死体験のほとんどは、私たちを待ち受けている素晴らしい霊的な光をほんの少し垣間見ただけのものだ。しかし、このような光を遠くから眺めただけで、蘇生によってまだ肉体に戻ることができる状態と、完全に肉体から解き放たれてこの光の中へ入り込み、自分をそこに浸らせるのとでは大違いだ。完全な死とは、私たちを震撼させる境界であり、過去の肉体化を手放して永遠なる治癒プロセスを始めるときなのだ。



ヒエロニムス・ボス、Ascent of the Blessed

(祝福された者の樂園への上昇)

/写真No.5 魂が光の中へと旅立つ

通常はこの時点で、心の中に残っていた罪の葛藤が活発化する。不安が沸き起こるのは(霊の光)が大き過ぎ美し過ぎるため、そして一方でまだ自分の幻想的な考えや希望が心を大きく支配しているからだ。そのため、そういった人々は新たに夢の中に逃げ込み、別の肉体化の中に逃げ込んで、思い違いから生じているこの痛みを耐えなくても済むようにしようとする。肉体化に次ぐ肉体化、夢に次ぐ夢。それなのに人は普通、自分がこの夢という映画の監督であることに気づいていない。夢の方が勝手に現れるのだと思っている。自分は舞台の上で動いている操り人形だと思い込んでいるのだ。夢を見ている人は、自分

の心の中に決定する力があることを知らない。本当は、自分は糸を操ったりスクリーンに絵を映し出したりする人形使いなのに。実際は自分の望みや不安が芝居を生み出し、白いスクリーンに映画を投影する。その人の意志がなければ夢は作られないのだ。

ここに自殺によって有罪判決を免れた加害者がいる。ハインリヒ・ヒムラーはナチス政権下、ナチス親衛隊SSの指導者であり、ドイツ警察長官だった。ホロコーストやロマ虐殺など、多くの犯罪の主たる責任を負う一人だ。人類の歴史の中では、これまであらゆる類の残酷な犯罪が繰り返されてきた。それは、この世界という枠で人類が経験してきた中では否めないことである。人類の歴史は流血の歴史、途方もない苦悩の歴史だ。



ハインリヒ・ヒムラーが1936年5月8日ダツハウ強制収容所を訪問/写真No.6

(参考文献一覧参照)

私たちはみな自分の感覚器を信用しているが、外のこの世界の存在は確かにこのような主観的な体験レベルで信じるほかない。出来事は起こり、過ぎ去る。人間は生まれて生き、そして死ぬ。被害者になり、加害者にもなる。肉体は朽ち、最後には何も残らない。だが魂は、心はどこへ行くのだろうか。心についてもっと知りたいと思えばどんな問いかけも許されよう。いわゆる現実（私たちの世界）はどのくらい本当なのだろうか。私たちはどこから来てどこへ行くのだろうか。ハインリヒ・ヒムラー、あるいは彼を投影していた心は今どこにいるのだろうか。私たちは心の集合体としてヒムラーと、あるいは彼の心とどんな関係にあるのだろうか。ヒムラーの自己中心的で破壊的な衝動が私たち全員に何がしかの影響を与えることはないのだろうか。私たちも、彼のような性格で彼のような権力の座についていたら同じような行動をしはしなかつただろうか。このような“全体を成す心の一部”もやはり〈父〉の中にいる一人の〈神の子〉へと戻るのか。私にできるのは自分自身の体験に基づいて問いかけ、それを通じて内側のプロセスを動かすことだけだ。だがそれとともに、このプロセスがすべての人々の治癒に役立つよう願っている。



45年5月23日当日のヒムラーの遺体。

リュネブルクの英国軍司令部の訊問室で/写真No.7

一つ観察すべきことがある。感情に突き動かされて他人の中の何かを追い詰めていくとき、それは結局常に自分自身に向けられているということだ。カール・グスタフ・ユングの心理学は、自分の中には恐怖を引き起こす厭われた魂の一部があると言っている。私たちはそんな影の部分で分裂させ、他人に投影させる。ひどいときは流血をも厭わぬほどに追い詰める。これこそがまさに自我の戦略なのだ。自分の心の中にある罪は見ず、他人に投影されたとき罪はさらに強化される。しかし、そんな罪を見ても、〈神〉への攻撃は決して行われていないのだから、見つけられることなど何もない。だが、その攻撃がなかったと思えば、罪の原因の次元が変わる。人間同士の次元での根源的な葛藤の投影という道から引き戻されて全員が一人の〈神の子〉となり、〈神〉との関係が存在する次元にたどり着くのだ。

転生について考えるべきか

前世という構想については、現在人間関係で問題を抱えており、そこから前世について疑問が出てきたときにのみかかわったほうがよい。ちょうど私が体験したように。私はマルガレーテとの問題から逃れられないと感じ、彼女との間に安らぎを見つけることができなかった。それを通じて疑問がどんどん広がり、私のこれまでの人生をも超越することになった。この葛藤は平常の枠を吹き飛ばし、そこに意味があるのかどうかすら私にはわからなくなった。やっとのことで解決できたのが、転生という構想を通じて考えたときだった。この前世という限界のある夢構想の向こう側には、次のような否定できない真理の核がある。

1. 私たちはみな互いに知己であり、少なくとも必ず“二回”は出会って

いる。

2. 私たちはみな互いに結ばれている。私たちは全体を成す心（体系的家族療法ファミリー・コンステレーション創始者パート・ヘリンガーの言葉）の一部であり、〈神の子〉の一部、〈神の霊〉の一部である。
3. 他人と分かたれた個々の存在というものは本当はない。私たちはみなが入り組んで存在しているのだが、分極化した意識の中、また肉体的な催眠状態にある中ではそう考えることができない。
4. この夢の中の出来事において私たちは誰しも被害者と加害者である。これが特異な愛憎関係の核であり、ACIMは次のように説明している。加害者と被害者は交代するが、それは私たちが投影している復讐に燃え盛る神との罪の葛藤を映し出し、明示できるようにするため。それは自我のゲームであり、人間のドラマである。
5. 人類の歴史は流血という無意味な悪夢である。そこにあるのは、有意義とは稀にしか言い得ないインスピレーションと〈真理〉の反映であり、それ以上のものはない。
6. この幻想の世界は、赦しを通じて救済と治癒を体験するための学びの教室として利用されるべきである。私たちは自分がこの世には一度もいなかったこと、世界というものは存在したことがないことを認識すべきである。
7. 私たちは魂であり、心である。私たちが救済を得られるよう、私たちにそれを伝えたいと願う〈霊的世界〉が存在する。本当の救いは夢という母胎ではなく、〈霊〉の〈現実〉からのみやってくる。この〈救い〉を信じ求める意思があれば、誰もがそれを体験できる。

転生はどのくらい現実なのか

すべては夢を見ている心の中で、つまり私たちの中で起こっている。その外側では何も起こっていない。〈永遠〉が夢と接触することはなく、幻想も手出しはできない。私たちは幻想の世界を夢見たいがゆえにそういう〈永遠〉の中にいることに気がついていないだけなのだ。

過去の探求

催眠術などの技術を用いてまで前世を探ることは勧めない。当時、いろいろと考える中で私の元にやってきたのは、すべて覚醒状態であつかりとわかったことばかりで、消化も簡単だった。今日では多くの人の意識がほかのレベルまで、つまり前世やカルマ的な人とのつながりまで感じ取るようになってきている。現在は過去の反映であり、人は嫉

妬や復讐といった古い問題を最終的に赦しを通じて清算するために再び出会う。しかし、最高の霊的レベルにおいては、これらすべては一人の〈神の子〉の中に映し出されているだけであり、その〈神の子〉とは私たち全員の集合だ。そういう意味で、私は常に私だけを見ているのだし、自分自身を- 見たところ他人だが- 赦したほうがよいのである。現在とは治癒と安らぎに続く門だが、過去や未来はそうではない。誰も歩んでいる道の最後で過去を手放し、忘れてもよいのだし、そうすべきなのだ。なぜなら、それはすべて夢でしかなかったのだから。これらの夢は私たちにアイデンティティーと特有性を与えてくれるが、その代償もまた大きい。欲深い競い合いと恒常的な不安が人間の生命の原動力となり、戦争の刺激が心に深く根ざすようになってしまった。

転生は幼稚園程度のレベルで扱われることもある。“誰がどの時代に誰だったのか”というゲームが自慢げにやりたい放題行われるときだ。そうすると、それぞれの役割はさまざまな”霊的な集団“に手早く振り分けられ、すぐに歴史上の偉大な人物- もちろん善人と正義の味方のみ- が一人残らず姿を現す。モーゼからマリアとヨゼフ、ヨハン・セバスチャン・バッハからルートヴィヒ2世まで、高貴な共同体の一所に全員が再び現れるのだ。唯一どこにも見つけることができないのは、30年戦争のときに樫の木に吊り首にされた哀れな農夫と、強姦され続けた城主の下女くらいである。

霊的教えACIMは〈霊的世界〉との共同作業を奨励している。私自身はかなり幼いころからこの〈導き〉を経験してきた。天使が話しかけてきたのだ。この天使とは高く重要なレベルにいる、私と分かたれた存在ではなく、私の中核を意味している。つまり、私の真の〈自己〉だ。天使、それは私でもある。これは高慢でも思い上がりでもなく、私の起源への告白、〈神〉への告白である。私は〈彼〉の中にいるし、〈彼〉は私の中にいる。そうすると私の心の中で、一人の人間、一つの肉体、あるいは一つの歴史があるという信仰あるいは構想が“気化”していく。これらのどれも私ではない。これらは私の夢の中にあっただけなのだ。

霊的〈導き〉は私の目覚めに適した賢明なカリキュラムを作ってくれた。私はこの治癒プロセスに己を委ねている。健全に吸収できない、耐えられないほど多くの情報を次々に得たところで何になるというのだろう。そんなことをしてもまた投影の罠に向かって走り、他人に罪をなすりつけ、他人を攻撃するだけだ。〈霊的世界〉に〈導き〉を任せるとき、まさに避けるべきなのがこのことだ。私たちはできるだけソフトに目覚めて霊的な教えに身をゆだね、それを実行すべきだと思う。大切なのは明白な〈治癒〉への方向性と、〈天使〉(イエス・キリスト)

〈霊的世界〉といった〈治癒〉を象徴することがらである。胸がうずくような過去生の罪が現れたら、まずはそれをよく見る（認識と理解の段階）。そして第二段階で、赦しを受け入れる（解放の段階）。何度も過去を掘り返し、結局病的なアイデンティティーを自分の中に捜すのみとなってしまふ人は、心の中でそれを現実にして〈治癒〉を逃してしまふ。ソドムでの過去を振り切れなかつたロトの妻のように、塩の柱と化するのだ。

イスラエルの映画監督モシェ・ジーマーマンの秀作「**Pizza in Auschwitz**（アウシュビッツのピザ）」では、ホロコーストを生き延びた74歳のダニー・シャノックが息子のサギと娘のミリを伴い、かつて生きてきた土地を訪れる。生家、今も健在の隣人女性、収容所へと出発した場所。彼は過去を振り切ることができず、いつの間にかアウシュビッツ＝ビルケナウ収容所の両親が殺された場所へとたぐり寄せられる。そして、自分が押し込められていた古いバラックの板張りの寝台で、子どもたちと一夜を明かしたいと言う。三人はそのバラックで時を過ごす。そこには耐え難い緊張感がみなぎっている。ダニー・シャノックの子どもたちは生きたいという思いから、アウシュビッツにはいつか終止符を打たなければならないと言う。しかし彼は被害者としてのアイデンティティーに必死でしがみついており、嘆くことしかしない。娘はアウシュビッツでピザを買い求め、寝台に横たわる父親に一切れ手渡す。いやいやながらも彼はピザを食べ始める。大きな苦痛とブラックユーモアにあふれた「アウシュビッツのピザ」。

「奇跡のコース」は私にとって神秘の学校だ。365のレッスンの中で、夢見る心は赦しの原理を通じて慎重に目覚めに導かれる。私たちは自分自身を、そして起こったことのないほかのすべての事柄をも赦す。心の中に起こる奇跡が赦しを導く。思い違いをやめさせ、消す。ACIMはこれを〈償い〉と呼んでいる。こうして私たちは永遠なる今にたどりつき、過去や未来といった幻想の抹消に同意する。〈天国〉は常に今なのだ。最後に教師のためのマニュアルのある一節を見てみよう。

このコースの重点は常に同じです。それはあなたに完全な救済が与えられる瞬間、そしてあなたがそれを受け入れられる瞬間にあります。あなたが負う責任はいつもこれだけなのです。〈償い〉は、過去からの完璧な脱却や未来に対する完全な無関心と同じだと言ってよいでしょう。〈天国〉はここにあるのです。ほかに場所は存在しません。〈天国〉は今です。ほかに時間は存在しません。そこへと導かない教え

は、〈神〉の教師にとって重要な教えとは言えません。正しく示されている信念には必ずこのことが示唆されています。このように考えれば、その真実性はその有益性の中にあると言えます。進歩へと導く信念はすべて尊重されるべきです。これはこのコースが求めている唯一の試金石であり、それ以上に必要なものではありません。（「奇跡のコース」：教師のためのマニュアル ドイツ語版：24.6：1-13/太字は著者による）

転生—ある一つの構想

これまで見てきた中で最終的に大切なことは、〈霊〉の〈現実〉にたどり着くためにすべての夢に別れを告げるということである。転生という構想は、私たちの夢を本当らしく見せるためにも役立つしてきた。どのストーリーにもさまざまな人物が現れたが、どれも私たちの（集団で）夢見る心のイメージでしかない。それを終わらせてもよいのか。それはまだ大切なのか。自分はまだこれらの夢に意味を与えたいのか。腹の足しにならないものを、絶対に安らぎを与えてくれないものを、空腹や憧憬の対象としたいのか。これが、〈現実〉に向かう私たちの旅ですべき最後の問いかけだ。

この旅の準備をしておくで後で大変役に立ち、幻想とも決別しやすくなる。肉体に始まりと終わりがあり、いつか死ぬということを私たちが知っているのは、唯一伝統的に受け継いできた見識に起因する。ここ、この世では、永遠に続くものを勝ち取ることはできないし維持することもできない。すべてが変遷し、すべてが最後には朽ちる。世界中の芸術品も、地球自体も、宇宙全体ですら滅亡の歴史をたどっているのだ。

幻想の世界で演じられるものは常に一つ。別れのドラマ、罪業と罪と不安と憎悪のオペラだ。私たちが歌っているのは絶望の歌だが、黙って心を不可侵の〈永遠〉に向けることもできる。これは、今ある確かな霊的教えでは必ず求められていることだ。「奇跡のコース」もその中の一つだし、ほかにも多くの教えがある。その目的は間違ってもこの世を救うことではない。幻想を救うことはできないし、問題はこの世ではなく私たちの夢見る心にあるからだ。しかし、ほとんどの人はまだこのような見方に抵抗を示し、ユートピアを夢見ている。そのユートピアは政略的にどうしても必要なものなのだ。この世界は目覚めのための教室であり、そういう意味で私は（どうやら）まだもう少しばかりここにおいて、（心的な）総体すべてのためにやるべきことをやる（ことになっているようだ）。みなが自分の心を治癒させようと努め

れば、必ずや“苦しみの時間は短縮される”だろう。私はこのまま進む。これ以上のことはできないし、これ以下のこともできない。



最後に、この霊的教えの見地を私の言葉で53点にまとめてみる。

1. 〈神〉は、在る。
2. 〈神〉は〈霊〉- 〈愛〉であり、それのみである。
3. 〈神〉という〈愛〉は〈愛〉のみを“拡大”できる。
4. 〈神〉は〈一つの原因〉、〈一つの源泉〉である- そのほかには何もない。
〈神〉の外、〈天国〉の外に生命はない。
5. 言葉はシンボルのシンボルである。〈父〉〈息子〉〈聖霊〉は想像の及ばない〈存在〉の隠喩である。
6. 私は自分が何なのか、たぶんまだ知らないが、自分が自分であることは確信している。“私ではない”とは言えない。
7. 私は〈神の霊〉からできた心である。私は永遠に〈彼の子〉である。
8. 〈彼の子〉に向けられた〈神の意志〉とは、〈安らぎ〉と〈喜びにあふれた状態〉のみ。
9. 観念はその源を離れない。内側でも外側でも〈存在〉から分離することはない。“そちらの外側に”そちらの外側というものは存在しない。
10. 私は〈神〉と同じように創造力を備えている。
11. この創造力は思考の中に現れ、〈愛〉か、あるいは罪、不安、憎悪をもたらす。
12. 思考の元には常に一つの決定がある。それは〈愛〉を選ぶか、あるいは幻想つまりこの世という夢を選ぶかのどちらかである。
13. 決定能力の中にあるものが私本来の力である。
14. この世界を現実だと信じているということは、分離や分裂という観念を信じているということであり、自分はそれに苦しんでいる。

15. そのため肉体を作って分離という観念を現実に見せかけ、ほかの肉体つまり他人は自分と分かれた存在だと思い込んでいる。
16. 肉体を持つ物質界は幻想であり、夢である。それはかつて心の中に現れ、しばらくの間留まり、再び無くなるように見える。だが、実はもうずっと前に無くなっている。
17. 私は自分の世界を作った。それは、それが現実だと信じる自分の決定の上に成り立っている。私はこの世界が現実ではないとすることもできるが、これを現実として生きていく。
18. 幻想の世界で体験することはどれも、夢見る(神の子)の心の中にその原因がある。無数の肉体が存在するこの世界はその作用でしかない。
19. 心の中で体験したすべてのことがらの原因を認めて初めて、私は心を変化させ- 心の治癒を願い- 救われた別の世界を経験することができる。最後にはこの世界も消滅し、私は(天国)つまり(純粹な霊)の元へと帰ることができる。
20. (実在する)のは、現れも消えもしないもの- つまり、永遠かつ不変のものである。
21. 幻想の世界は分離という観念にもとづいており、時間と空間の中に現れる。これらはすべて(神の現実)とは無関係である。
22. 決定は一つの観点で行えるのみ。(愛)つまり(神の本質)を選ぶか、罪、不安と憎悪、自我の本質、幻想を選ぶかである。
23. 分裂した心(自我、(自己)、決定者)の一部である自我の中には唯一、分離への確信があるのみ。
24. 肉体は分離を本当らしく見せ、分離に伴う罪を隠すため、つまり罪をほかの肉体に投影するために作られた。
25. (聖霊)は常にここにいる。なぜなら私は(神の霊)からできた心だから。(彼)は(愛)のみを拡大でき、それによって勘違いだらけの世界を作っている夢をくまなく照らし出す。
26. 幻想は幻想でしかない。見た目が小さくても大きくても、あるいは道徳的に排すべきものであってもそうでなくても。幻想にヒエラルキーはない。
27. 幻想は勘違いであり、赦しによって終結する。赦しとは自分の心の治癒を意味し、目覚めの鍵となるものである。
28. 自分が本当は純粹な(霊)であることを自己否定すれば、自我や肉体という幻想を信じることになる。だが本当は、私は(神)の観念である。(真実)を否定することは罪業ではなく勘違いである。
29. 自我は私に個性と特有性をくれた。これらは分離という観念の上に成り立っているもので、私は他人と自分を区別し際立たせるために、自分を彼らから分離させなければならない。

30. 個性と特有性は常に何らかの形の競争、ひいては戦争につながる。
31. あたかも実存するかのように見えるこの世界で何を経験しようとも、それはすでにそれ以前、自分の心が何を信じるかと決めたことが元になっている。
32. 幻想を変えることはできない。つまり、世界を変えることが大切なのではない。幻想は無である。そうである限り、世界は修復することも救うこともできない。できるのは世界が幻想でありまやかしてあることを認めることのみ。そうすれば、幻想は心から消え、意味をなさなくなる。
33. 幻想世界を変えたいとき、私は魔法を使う。私たちが行っていることのほとんどはそれに等しい。
34. しかし本当は魔法ではなく、分裂した心を治してくれる〈聖霊〉の助けを求めるべきだ。
35. 魔法に対する私の答えは赦ししかない。幻想的な方法で幻想世界に変化を引き起こしたいと思っている自分を赦すのである。
36. 罪業を信じること、すなわち分離という観念は〈愛〉の〈一致〉に対する攻撃の表れであり、否応なく罪の体験へと導く。これは夢見る人すべて、つまり全人類の心の問題である。
37. 自分の罪を信じる時、私は魔法を使い、自分の罪に耐え切れなくならないように幻想世界を作らざるを得ない。そうして神の愛の代わりをいつまでも探し続け、特異な愛憎関係に入り込んでいく。
38. 幻想世界は、罪が本当であると信じることによってその全体が作られている。
39. 自我を選べば、罪を信じることになる。なぜなら、分離という思考によって〈神の一致〉への攻撃が現実であると思い込み、神の復讐（私たちが投影している復讐する神）を恐れるようになるからだ。
40. 罪は耐え切れない精神状態を意味し、怒りや憎悪となって他人に投影される。これがこの世界で起こるあらゆる戦争の根源である。
41. 自分を非難している（自分の罪を現実だと信じている）ことから、私は必然的にほかの人々も非難することになる。そうすると、自分の罪もそこに投影してしまう。
42. 自分を非難しなくなつて初めて、ほかの人々を非難せずに済むようになる。〈現実〉の〈光〉の中では、罪を負う人は一人もいない。
43. 〈聖霊〉は幻想世界のすべての事柄を新しく解釈し直し、それを〈彼の〉目的- 〈愛〉- のために活用できる。だがこれにはまず、自分の心の中にいる〈彼〉が自分に働きかけてくることを許す決定を自ら行う必要がある。
44. 空間と時間から成る幻想世界の中で〈聖霊〉が主導権を握ると、あるいは逆に自分の中で自我が主導権を握ると、それは常に100%の

支配となる。そのため私は常にこの両方の声の間を、つまり〈聖霊〉と自我の間を行ったり来たりすることになる。

45. 〈愛〉に代わるものはない。〈愛〉のほかには何もない。
46. 自我は、〈愛〉の代わりがあると思っっている。それは肉体、食べ物、セックス、スポーツ、パートナー、車、家、旅行、芸術、哲学、政治などで、とくに強いのが愛憎関係。
47. 大切なことは永遠の〈霊〉の中に帰ること、あるいは自分は〈彼〉の元を離れたことがないと知ることである。
48. 自分は〈神の子〉であり、〈彼〉の中で永遠に安らかにいられると気づくことこそが救済という奇跡である。私は罪を背負わず、ほかの誰もみなまた同じである。私たちは全員が〈一人の神の子〉であり、〈キリスト〉である。
49. 救済は理論ではなく実際に行うものである。それは赦しという数多くの歩みから始まる。たとえ自分は肉体の中に存在すると信じ、それに（まだ）しがみついても。
50. 何かを攻撃するのはやめたほうがよい。攻撃し、追い払いたいと思ったとき、心の中でその対象となるものの存在をより強め、それを自分の現実にしてしまうからだ。
51. 他人に与えるものは何であれ、本当は自分自身に与えている。
52. 死は私たちが〈神〉すなわち〈愛〉に対して抱いている不安のシンボルである。死は無である。私は〈神の霊〉から生まれた心であり、よって不死である。
53. 存在するのは〈いのち〉のみ、存在するのは〈愛〉のみである。これが〈神の現実〉である。

私たちは言います。“〈神〉は、在る”と

そして話すのをやめます

こう認識すれば、言葉は意味を持たなくなるのですから

（「奇跡のコース」ドイツ語版：ワークブック-169.5: 4）

荒野のおおかみ
私の中にいる
おおかみの夢を見た
せわしなく食欲に私を駆り立てながら
略奪行を続ける
おおかみが考え出した数ある世界
そんな世界の幸福を手に入れようと
私はおおかみにその数々の世界を買ってやった
高い代価を支払って
私の魂は彼のものとなり
彼はその私のおかげで生きている
私は誕生と死の罫いから
二度と逃れられない
ここで自ら行った決断を知った
何千年もの間
欲と苦痛で
私をがんじがらめにしていた決断を
私はずっとそれに加担してきたけれど
今になってあの貪欲な狩りの
無意味さを感じる
これがあらゆる夢からの
目覚めの始まりだった

著者紹介

ラインハルト・リーア、1960年生まれ。治療師、霊的教えと体系的家族療法ファミリーコンステレーションの講師、著者。再婚、二人の子どもと五人の孫を持つ。薬剤師の家庭に生まれ（ドイツ、ニーダーザクセン州）、2009年からスイスに住む。活動の中核は、霊的教え「奇跡のコース」と結びつけたファミリーコンステレーション。詳細はウェブサイトwww.lier.de（ドイツ語）を参照。

参考文献一覧

第一部

表紙絵を含む油絵の写真は、特に記されていない限りラインハルト・リーアの作品を写したもの。

ラインハルト・リーアを写した写真及びアメリカの写真の著作権はすべてラインハルト・リーアに属する。

P.14: “描画中”、撮影: ペルピニャン近郊出身のフランス人 (ジャック?) /1980年秋

自画像写真は基本的に自動シャッター撮影

「奇跡のコース」ドイツ語版からの引用: Ein Kurs in Wundern, 2006年、7版、Greuthof-Verlag und Vertrieb GmbH, Gutach i. Br.

ISBN: 978-3-923662-18-0 ; 原題: A Course in Miracles / Foundation for „A Course in Miracles“, Temecula, CA, USA; ACIM, T (テキスト) /M (教師のためのマニュアル) /W (ワークブック) と表記、詳細ニサルガダッタ・マハラジの言葉“*Ich bin*” 3巻/Kamphausen-Verlag ; 不二一元論 (Advaita/Vedanta) を理解するために強く勧めたい一冊: P.36とP.44

図: ラインハルト・リーア

第二部

写真**No.1**: 精神分析の草分けジークムント・フロイトが葉巻をくゆらす。日付: 1922年。出典: グーグルにアップされたLIFE Photo Archive。ファイル名e45a47b1b422cca3 作者: Max Halberstadt

写真**No.2**: 北ロシア- パルチザンの銃殺; PK 694; 1941年9月; 撮影者: Thiede; Bundesarchiv; Bild 101L-212-0221-06; ファイルデータ/時間: 11: 09, 2008年12月9日

写真**No.3**: 栄養失調の捕虜、食べ物をわずかしかももらえず餓死寸前。オーストリア、エーベンゼー強制収容所。同収容所は名目上“学術的”実験に使われた。米第80師団が解放。日付: 1945年5月7日; 出典: National ArchivesおよびRecords Administration蔵。カタログ名ARC Identifier (National Archives Identifier) 531271。作者: Samuelson, Lt.A.E.; 許可: National Archives; バージョン: 01: 18, 2006年12月30日

写真**No.4**: ベルギーのリエージュ解放後、大勢のドイツのゲシュタポ隊員が拘束され、シタデル (城砦) にある一つの監房に全員が幽閉された; 日付: 1944年10月ごろ; 出典: NARA National Archives and Records Administration ; 作者: Signal Corps Photographs of

American Military Activity; 許可: 制限なし; バージョン: 23: 09, 2007年4月25日

写真No.5: ヒエロニムス・ボス (およそ1450~1516年); 題名: Ascent of the Blessed; 日付: 1490年頃から1516年頃のあいだ; 媒介: 油絵、パネル; 寸法: 高さ86.5cm; 幅39.5cm; 出典 撮影者: art database; ほかのバージョン: ファイル: Ascent of the Blessed.jpg/www.wga.huのバージョン

写真No.6: ハインリヒ・ヒムラーが1936年5月8日にダッハウ強制収容所を訪問; 撮影者: Friedrich Franz Bauer; 機関: Sammlung Berlin Document Center (Bild 152-11-12/CC-BY-SA)

写真No.7: ハインリヒ・ヒムラー (1900~1945): 1945年5月23日、自殺をしたハインリヒ・ヒムラーの遺体が英国軍第二司令部の床に横たわる。作者: Sutton L (Sgt): № 5 Army Film & Photographic Unit; Post-Work: ユーザー: W. wolny 出典: Imperial War Museumsの収蔵品BU6738。

目次

私はアメリカで死んでいた

奥付

まえがき

第一部

第二部

参考文献一覧